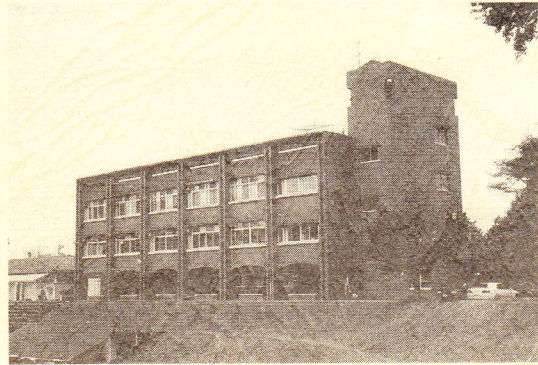


平成11年度

慶應義塾大学体育研究所

活動報告書



目 次

巻 頭 言	1
体育研究所所員及び所内組織図	2
第1部 研究分野	
1. 個人研究業績及び研究教育活動	5
2. 研究助成・補助金	17
3. 所内定例研究会発表要旨	18
4. 体育研究所プロジェクト研究について	30
第2部 教育分野	
1. 体育理論（スポーツサイエンス）と保健衛生（ヘルスサイエンス）	31
2. 体育実技（スポーツクラス）	32
3. 通信教育学部保健体育科目	38
4. 平成11年度体育実技（スポーツクラス）履修者アンケート集計結果	39
第3部 スポーツ振興分野	
1. スポーツ大会	49
2. 公開講座	51
3. 教職員対象フィットネスプログラム	53
4. シンポジウム	54
5. 学生総合センターとの協力	56
6. 所内施設の開放	56
7. スポーツ振興活動の今後	58
編集後記	59

巻 頭 言

体 育 研 究 所

所 長 高 嶺 隆 二

高齢化社会がいよいよ定着してきているわが国であるが、それにつれて国の福祉政策の充実を求める声はますます高まってきている。一方、余暇の増大と食生活の多様化による生活習慣病（成人病）の若年化も医療関係者から指摘されている。医療技術の高度化は喜ばしいことではあるが、医療に頼らず生活をエンジョイする方法・手段を学ぶことも大切な要素であろう。生涯学習が叫ばれて久しい。それに伴って健康の維持・増進を目的とした生涯スポーツの概念も世の中に定着しつつある。

大学での保健体育科目実施の目的は、単に現在（在学期間）の健康・体力問題を課題としているわけではない。体育・スポーツ活動を実践する過程で生涯を通じての心身の健康の維持・増進に寄与する知識や方法、スポーツを楽しむ技術の習得、人との交流を豊かにする事等を学ぶ機会を与えているものである。

またその成果をみるためにFDを目的とした「学生による授業評価（アンケート）」を実施して教育の質の向上を目指す試みを実践している。

体育研究所では、平成8年度に「21世紀のスポーツ・健康教育一慶應義塾を発信源として」と題する研究プロジェクトを立ち上げ、12年度末の完結を目標に現在その纏めに日々尽力しているところである。

また昨年度に引き続き、大学におけるスポーツの在り方を考えるシンポジウム「キャンパスライフとスポーツⅡ」を開催した。今後もスポーツをテーマとしたシンポジウムを開催していきたい。本年度は新たに地域住民を対象とした公開講座（スポーツ&フィットネス教室・4講座）の開講にも着手した。

11年夏には、塾当局の計らいで研究室内床のOAフロア化が実現し、所員の研究活動の能率向上が図られる環境が整った。

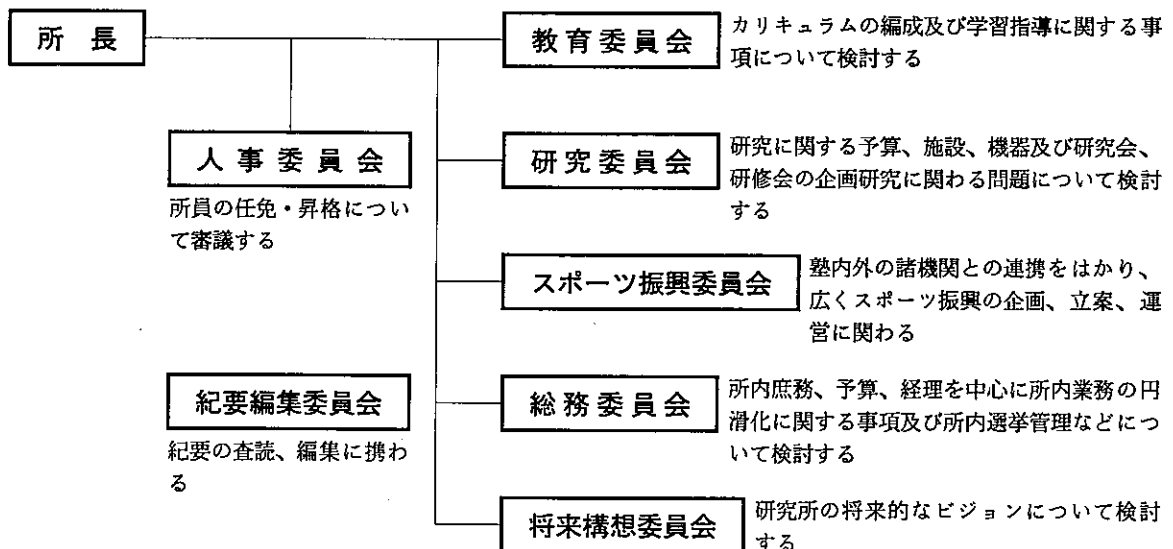
平成11年度活動報告書の発刊にあたり、諸々の事業遂行のためにご助力を頂いた塾当局、日吉事務室の皆さんにこの場を借りて御礼を申し上げたい。

体育研究所及び所内組織図

体育研究所所員名簿

氏 名		所 属 委 員 会
所 長	高 嶺 隆 二	人事委員会、紀要編集委員会
教 授	橋 本 治 雄	人事委員会、紀要編集委員会
	今 栄 貞 吉	人事委員会、研究委員会、紀要編集委員会
	近 藤 明 彦	人事委員会、教育委員会、紀要編集委員会
	安 藤 勝 英	人事委員会、総務委員会、紀要編集委員会
助 教 授	篠 原 しげ子	研究委員会
	植 田 史 生	人事委員会、スポーツ振興委員会
	綿 田 博 人	スポーツ振興委員会
	松 田 雅 之	研究委員会
	佐々木 玲 子	教育委員会
専任講師	石 手 靖	スポーツ振興委員会、将来構想委員会
	山 内 賢	教育委員会
	吉 田 泰 将	総務委員会、将来構想委員会
	加 藤 大 仁	教育委員会、将来構想委員会
	村 山 光 義	教育委員会、研究委員会、将来構想委員会
助 手	野 口 和 行	スポーツ振興委員会、総務委員会
助 手 (嘱 託)	小 森 康 加	総務委員会
	須 田 芳 正	教育委員会
	村 松 憲	研究委員会
	望 月 康 司	スポーツ振興委員会

体育研究所組織図



平成 11 年度体育研究所人事

平成11年 4 月 1 日付

望 月 康 司

助手（嘱託）採用

平成11年10月 1 日付

高 嶺 隆 二（教 授）

所長就任（重任）

近 藤 明 彦（教 授）

学習指導主任就任（重任）

佐々木 玲 子（助教授）

学習指導副主任退任（重任）

加 藤 大 仁（専任講師）

学習指導副主任就任（重任）

平成12年 3 月31日付

小 森 康 加（助手（嘱託））

退 職

第1部 研究分野

概 要

体育・スポーツの研究領域は、ヒューマンサイエンスとして幅広い対象・内容を持ち、細胞レベルの生理現象から、身体活動によるパフォーマンスや心理状態の評価、スポーツを通じた人の社会的結びつきや行動の変容、そして、それらを基礎に置いた実践であるスポーツの指導・教育方法まで多様である。こうした背景から、体育研究所においても20名のスタッフが個々の研究テーマを持ち、幅広い分野にアプローチをしている。こうした幅広い研究活動の報告・紹介として個人研究業績および所内定例研究会発表要旨を中心に研究分野報告を構成した。

また、個人研究以外に、平成8年度発足の体育研究所プロジェクト研究「21世紀のスポーツ・健康教育―慶應義塾を発信源として―」も4年を経過し、平成12年度にその報告書を発刊することとなった。このプロジェクトは、個人研究中心であった研究所の研究活動に新たな柱を加えたかたちとなり、平成11年度は最終報告までのタイムスケジュールを定めつつ、活動が推進されてきた。これらの成果はプロジェクト報告書完成の折に詳細に明示することとし、今回は各テーマ別グループの活動の概略を示した。

1. 個人研究業績及び研究教育活動

高嶺隆二（教授）

著書

著者	タイトル	出版社	年月
高嶺隆二	図解コーチ 水泳	成美堂出版	1999年7月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内容	年月
文部省認定地域スポーツ（水泳）指導員要件講習会講師	1999年12月

今栄貞吉（教授）

論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
安藤勝英、今栄貞吉、篠原しげ子、山内賢	重心位置と下肢筋群の筋力との関係について	慶應義塾大学体育研究所紀要	第39巻、第1号	2000年1月

学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
安藤勝英、今栄貞吉、篠原しげ子、山内賢、阿久根英昭、清水安夫、大西明宏、小嶋新太	重心位置と下肢筋群の筋力との関係について	日本体力医学会第49回大会	1999年9月
阿久根英昭、近藤傳二、宮崎光次、清水安夫、今栄貞吉、安藤勝英、篠原しげ子、山内賢、大西明宏、小嶋新太、下川哲徳、小山康文	静立時の足底圧力分布状態とスポーツ傷害との関係について—測定法の基準設定と足底圧力分布図の分類—	日本体力医学会第49回大会	1999年9月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内容	年月
財団法人日本体育協会主催、財団法人東京都体育協会主管 財団法人日本体育協会公認C級スポーツ指導員資格移行講習会講師	1999年12月

近藤明彦（教授）

論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
Akihiko Kondo, Dieter Teipel, Soichi Ichimura	Attitude toward stress condition in German and Japanese Soccer Players	Psychology of Sport and Exercise: Enhancing the Quality of Life, 10th European Congress of Sport Psychology Prague 1999	Proceedings Part 2	1999年7月
植田史生、近藤明彦、 佐々木玲子、山内賢、 村山光義、小森康加、 上向貫志、田中伸明	学生の将来のスポーツ実施の意思と運動・スポーツ活動に関する意識	東京体育学研究	1999年度報告	1999年12月
植田史生、近藤明彦、 佐々木玲子、山内賢、 村山光義、小森康加、 上向貫志、田中伸明	学生の運動実施キャリアパターンと運動・スポーツ活動に対する意識	体育研究所紀要	第39巻第1号	2000年1月

安藤勝英（教授）

論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
安藤勝英、今栄貞吉、 篠原しげ子、山内賢	重心位置と下肢筋群の筋力との関係について	慶應義塾大学体育研究所紀要	第39巻、第1号	2000年1月

学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
安藤勝英、今栄貞吉、 篠原しげ子、山内賢、 阿久根英昭、清水安夫、 大西明宏、小嶋新太	重心位置と下肢筋群の筋力との関係について	日本体力医学会第49回大会	1999年9月
阿久根英昭、近藤傳二、 宮崎光次、清水安夫、 今栄貞吉、安藤勝英、 篠原しげ子、山内賢、 大西明宏、小嶋新太、 下川哲徳、小山康文	静立時の足底圧力分布状態とスポーツ傷害との関係について—測定法の基準設定と足底圧力分布図の分類—	日本体力医学会第49回大会	1999年9月

篠原しげ子（助教授）

論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
安藤勝英、今栄貞吉、 篠原しげ子、山内賢	重心位置と下肢筋群の筋力との関係について	慶應義塾大学体育研究所紀要	第39巻、 第1号	2000年1月

学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
安藤勝英、今栄貞吉、 篠原しげ子、山内賢、 阿久根英昭、清水安夫、 大西明宏、小嶋新太	重心位置と下肢筋群の筋力との関係について	日本体力医学会第49回大会	1999年9月
阿久根英昭、近藤傳二、 宮崎光次、清水安夫、 今栄貞吉、安藤勝英、 篠原しげ子、山内賢、 大西明宏、小嶋新太、 下川哲徳、小山泰文	静立時の足底圧力分布状態とスポーツ傷害との関係について－測定法の基準設定と足底圧力分布図の分類－	日本体力医学会第49回大会	1999年9月

植田史生（助教授）

論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
植田史生、近藤明彦、 佐々木玲子、山内賢、 村山光義、小森康加、 上向貫志、田中伸明	学生の将来のスポーツ実施の意思と運動・スポーツ活動に関する意識	東京体育学研究	1999年度 報告	1999年12月
植田史生、近藤明彦、 佐々木玲子、山内賢、 村山光義、小森康加、 上向貫志、田中伸明	学生の運動実施キャリアパターンと運動・スポーツ活動に対する意識	慶應義塾大学体育研究所紀要	第39巻 1号	2000年1月

学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
植田史生、吉田泰将、 佐々木玲子、村山光義、 小森康加、福本修二	剣道における素振りの指導法に関する調査研究	日本武道学会第32回大会	1999年9月
吉田泰将、植田史生、 佐々木玲子、村山光義、 小森康加、福本修二、 望月康司	剣道の素振りにおける剣先軌跡の三次元的分析	日本武道学会第32回大会	1999年9月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内 容	年 月
ハワイ プナホウスクール JAPAN TRADITIONAL PERFORMING ARTS SOCIETY 剣道講師	1999年10月
南ドイツ剣道連盟 新年稽古会 剣道講師	2000年1月
ハーヴァード大学剣道 特別稽古会 剣道コーチ	2000年2月

綿田博人（助教授）

論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
須田芳正、田中博史、川合武司、高橋宏文、綿田博人	各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討(1)	慶應義塾大学体育研究所紀要	第39巻、第1号	2000年1月

松田雅之（助教授）

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内 容	年 月
慶應義塾体育解競走部監督	通 年
関東学生陸上競技連盟評議員	通 年

佐々木玲子（助教授）

論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
植田史生、近藤明彦、佐々木玲子、山内賢、村山光義、小森康加、上向貫志、田中伸明	学生の将来のスポーツ実施の意思と運動・スポーツ活動に関する意識	東京体育学研究	1999年度報告	1999年12月
植田史生、近藤明彦、佐々木玲子、山内賢、村山光義、小森康加、上向貫志、田中伸明	学生の運動実施キャリアパターンと運動・スポーツ活動に対する意識	慶應義塾大学体育研究所紀要	第39巻、第1号	2000年1月

学会発表

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
植田史生、吉田泰将、佐々木玲子、村山光義、小森康加、福本修二	剣道における素振りの指導法に関する調査研究	日本武道学会第32回大会	1999年9月

氏名	タイトル	学会名	年月
吉田泰将、植田史生、 佐々木玲子、村山光 義、小森康加、望月 康司、福本修二	剣道の素振りにおける剣先軌跡の三次元的 分析	日本武道学会第32回大会	1999年9月
佐々木玲子、小森康 加	週一回の体育実技における運動継続実施が 女子学生の体力、健康意識に及ぼす影響	日本体力医学会第54回大会	1999年9月
佐々木玲子	子どもの上肢動作における一側・両側使用 による動作パフォーマンスの差異	日本体育学会第50回記念大 会	1999年10月
小森康加、佐々木玲 子、藤原寛康、高橋 淳一郎、榎本至、藤 本秀樹	移動距離からみた水球競技の特性	日本体育学会第50回記念大 会	1999年10月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内 容	年 月
日本バイオメカニクス学会機関誌「バイオメカニクス研究」編集委員	通 年
比較舞踊学会理事	通 年
比較舞踊学会第10回大会実行委員長	1999年10月

山内 賢（専任講師）

論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
植田史生、近藤明彦、 佐々木玲子、山内 賢、村山光義、小森 康加、上向貫志、田 中伸明	学生の将来のスポーツ実施の意思と運動・ スポーツ活動に関する意識	東京体育学研究	1999年度 報告	1999年12月
山内 賢	ゲーム理論のスポーツへの応用—バレーボー ルを例にして—	慶應義塾大学体 育研究所紀要	第39巻、 第1号	2000年1月
安藤勝英、今米貞吉、 篠原しげ子、山内 賢	重心位置と下肢筋群の筋力との関係につい て	慶應義塾大学体 育研究所紀要	第39巻、 第1号	2000年1月

学会発表

氏 名	タイトル	学会名	年 月
山内 賢、森田淳悟、 荻田 亮、千葉義信、 川上勝彦、大下聖治、 澤藤 甲、永田俊勝	ゲームの理論を用いたバレーボールにおけ る攻撃の分析	平成11年度日本運動・スポー ツ科学学会	1999年6月

氏名	タイトル	学会名	年月
安藤勝英、今栄貞吉、篠原しげ子、山内賢、阿久根英昭、清水安夫、大西明宏、小嶋新太	重心位置と下肢筋群の筋力との関係について	日本体力医学会第49回大会	1999年9月
阿久根英昭、近藤傳二、宮崎光次、清水安夫、今栄貞吉、安藤勝英、篠原しげ子、山内賢、大西明宏、小嶋新太、下川哲徳、小山康文	静立時の足底圧力分布状態とスポーツ傷害との関係について—測定法の基準設定と足底圧力分布図の分類—	日本体力医学会第49回大会	1999年9月
山内賢、森田淳悟、荻田亮、千葉義信、川上勝彦、大下聖治、澤藤甲、永田俊勝	Min-Max 定理のスポーツへの応用—1998年バレーボール世界選手権をモデルとして—	日本体育学会第50回大会	1999年10月
千葉義信、木村葉、山内賢	スノーボード傷害についての調査	日本体育学会第50回大会	1999年10月

吉田泰将（専任講師）

著書

著者	タイトル	出版社	年月
吉田泰将 他16名	剣道 社会体育教本	財全日本剣道連盟	1999年8月

論文・報告書等

著者	タイトル	誌名	巻・号	年月
吉田泰将	その後の大学体育⑥ 慶應義塾大学、独立自尊の教えの下に	バイオメカニクス研究	第2巻3号	1999年4月

学会発表

氏名	タイトル	学会名	年月
吉田泰将、植田史生、佐々木玲子、村山光義、小森康加、福本修二、望月康司	剣道の素振りにおける剣先軌跡の三次元的分析	日本武道学会第32回大会	1999年9月
植田史生、吉田泰将、佐々木玲子、村山光義、小森康加、福本修二、望月康司	剣道における素振りの指導法に関する調査研究	日本武道学会第32回大会	1999年9月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内容	年月
全日本剣道連盟公認社会体育指導員養成講習会（第22回～第28回）	通年

内 容	年 月
慶應義塾体育会剣道部コーチ	通 年
慶應義塾体育会高等学校剣道部師範	通 年
全日本剣道連盟社会体育指導員委員会幹事	通 年
全日本剣道連盟情報システム委員会委員	通 年
全日本学生剣道連盟将来構想検討委員会委員	通 年
ハーバード大学剣道部コーチ	通 年

村山光義（専任講師）

論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
植田史生、近藤明彦、佐々木玲子、山内賢、村山光義、小森康加、上向貫志、田中伸明	学生の将来のスポーツ実施の意思と運動・スポーツ活動に関する意識	東京体育学研究	1999年度報告	1999年12月
植田史生、近藤明彦、佐々木玲子、山内賢、村山光義、小森康加、上向貫志、田中伸明	学生の運動実施キャリアパターンと運動・スポーツ活動に対する意識	慶應義塾大学体育研究所紀要	第39巻、第1号	2000年1月

学会発表

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
植田史生、吉田泰将、佐々木玲子、村山光義、小森康加、福本修二	剣道における素振りの指導法に関する調査研究	日本武道学会第32回大会	1999年9月
吉田泰将、植田史生、佐々木玲子、村山光義、小森康加、望月康司、福本修二	剣道の素振りにおける剣先軌跡の三次元的分析	日本武道学会第32回大会	1999年9月
内山孝憲、村山光義	押し込み反力測定による筋の硬さ評価	第20回日本バイオメカニズム学術講演会	1999年11月
村山光義、米田継武	筋の硬さ測定に関する基礎的研究—筋張力と押し込み反力との関係—	第75回日本生理学会	2000年3月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内 容	年 月
東京厚生年金看護専門学校 水泳実習 講師	1999年7月

野口和行（助手）

著書

著 者	タイトル	誌 名	年 月
平野吉直、土井浩信、 野口和行、鶴川高司	野外体験と総合的な学習-実践事例からの アプローチ	日本野外教育研究所	2000年1月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内 容	年 月
アウトドアゲーム指導法講習会 講師	1999年6月
信州大学 野外教育 講師	1999年8月
東京学芸大学 アウトドアアクティビティ 講師	1999年9月
アウトドアゲーム指導法講習会 講師	1999年10月
信州大学 スキー実習 講師	2000年2月
東京学芸大学 スケート実習 講師	2000年2月

小森康加（助手）

著書

著 者	タイトル	出 版 社	年 月
小森康加（分担執筆）	スポーツ医学キーワード	文光堂	1999年12月

論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
小森康加、河野一郎、 斎藤まゆみ、坂田勇 夫	水泳運動が視覚器に与える影響	体力科学	48巻3号	1999年6月
前田明、小森康加、 芝山秀太郎	超速球を見るトレーニングが野球選手の動 体視力とバントパフォーマンスに及ぼす影 響	トレーニング科 学	11巻1号	1999年9月
石澤伸弘、小森康加	女子水球プレイヤーの競技会評価に関する 研究	日本体育学会50 回大会社会体育 専門分科会発表 論文集	第50回大 会号	1999年10月
佐々木玲子、小森康 加	週一回の体育実技における運動実施が女子 学生の体力、健康意識に及ぼす影響	体力科学	48巻6号	1999年12月
前田明、小森康加、 村松 憲、芝山秀太 郎	高校および社会人野球選手における疲労時 の全身反応時間、KVA 動体視力測定値の ばらつき	体力科学	48巻6号	1999年12月
植田史生、近藤明彦、 佐々木玲子、山内 賢、村山光義、小森 康加、上向貫志、田 中伸明	学生の将来のスポーツ実施の意志とスポー ツ・運動活動に関する意識	東京体育学研究	1999年度 報告	1999年12月

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
小森康加	水球競技と視覚	バイオメカニクス研究	3巻4号	1999年12月
小森康加	慶應義塾大学における『水泳』履修学生を対象とした調査	慶應義塾大学体育研究所紀要	第39巻、第1号	2000年1月
植田史生、近藤明彦、佐々木玲子、山内賢、村山光義、小森康加、上向貫志、田中伸明	学生の運動実施キャリアパターンと運動・スポーツ活動に対する意識	慶應義塾大学体育研究所紀要	第39巻、第1号	2000年1月

学会発表

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
Y. KOMORI, I. KONO, M. SAITO, I. SAKATA	The increase water flow rate might cause a damage of vision during swimming.	The 4th Annual congress of the European college of sports science	1999年7月
植田史生、吉田泰将、佐々木玲子、村山光義、小森康加、福本修二	剣道における素振りの指導法に関する調査研究	日本武道学会第32回大会	1999年9月
吉田泰将、植田史生、佐々木玲子、村山光義、小森康加、望月康司、福本修二	剣道の素振りにおける剣先軌跡の三次元的分析	日本武道学会第32回大会	1999年9月
佐々木玲子、小森康加	週1回の体育実技における運動継続実施が及ぼす影響について	日本体力医学会第54回大会	1999年9月
前田 明、小森康加、村松憲、芝山秀太郎	高校および社会人野球選手における疲労時の全身反応時間、KVA 動体視力測定値のばらつき	日本体力医学会第54回大会	1999年9月
小森康加、佐々木玲子、藤原寛康、高橋淳一郎、榎本至、藤本秀樹	移動距離からみた水球競技の特徴	日本体育学会第50回大会	1999年10月
石沢伸弘、小森康加	女子水球プレイヤーの競技会評価に関する研究	日本体育学会第50回大会	1999年10月
前田 明、小森康加、芝山秀太郎	冬季トレーニングキャンプにおける社会人野球選手のコンディションの推移	日本体育学会第50回大会	1999年10月
前田 明、小森康加、村松憲、芝山秀太郎	超速球を見るトレーニングの継続がレベルの異なる野球選手の打撃パフォーマンスに及ぼす影響	日本体育学会第50回大会	1999年10月
小森康加、望月康司、榎本至、児玉晋太郎、前田明	水球競技における視力矯正がゲーム中のパフォーマンスに与える影響	トレーニング科学研究会第12回大会	2000年3月

氏名	タイトル	学会名	年月
前田 明、小森康加、 児玉晋太郎、阿南貴 教	選手主導型 QC システムを用いた社会人野 球チームのスポーツビジョントレーニング の実例と評価	トレーニング科学研究会第 12回大会	2000年3月
児玉晋太郎、小森康 加、前田 明	Acu Vision 1000 のライト点灯時間が眼と 手の協応運動に及ぼす影響について	トレーニング科学研究会第 12回大会	2000年3月
榎本 至、小森康加、 州 雅明、高橋淳一 郎、高橋宗良、藤原 寛康、藤本秀樹、南 隆尚	ゲーム分析における水球プレーヤーのチー ム貢献度評価について	トレーニング科学研究会第 12回大会	2000年3月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内 容	年 月
日本水泳連盟水球委員会強化部科学研究 委員	通 年
神奈川県水泳連盟水球委員会 委員	通 年
トレーニング科学研究会特別プロジェクト準備委員会 委員	通 年
東京 YMCA 社会体育専門学校 水泳 講師	通 年

村松 憲（助手）

著書

著 者	タイトル	出 版 社	年 月
村松 憲、古川雅一	中高年から始めるイキイキ健康スポーツ	現代書林	1999年10月

論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
吉成啓子、高瀬クラ ラ、高橋亮輔、村松 憲	小型トランポリンを利用したテニスのサー ブ練習の効果	テニスの科学	8	2000年3月

学会発表

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
三浦 朗、友末亮三、 村松 憲、井上直子、 吉成啓子、小田南州 生	事前ジャンプを取り入れたサービス・リター ンの練習法	第11回テニス学会	1999年11月
前田 明、小森康加、 村松 憲、芝山秀太 郎	高校および社会人野球選手における疲労時 の全身反応時間、KVA 動体視力測定値の ばらつき	第54回日本体力医学会大会	1999年9月

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
前田 明、小森康加、 村松 憲	超速球を見るトレーニングの継続がレベル の異なる野球選手の打撃パフォーマンスに 及ぼす影響	日本体育学会第50回記念大 会	1999年10月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内 容	年 月
日本テニス協会医科学委員	通 年
大妻女子大学非常勤講師	通 年
白百合女子大学硬式庭球部監督	通 年
日本テニス協会主催、中学校及び低年齢ジュニア指導者講習会（北信越地区）講師	1999年10月
ラジオ出演（増田明美氏のレギュラー番組のゲスト、「中高年のスポーツ」をテーマに	1999年10月

須田芳正（助手）

論文・報告書等

著 者	タイトル	誌 名	巻・号	年 月
須田芳正、田中博史、 川合武司、高橋宏文、 綿田博人	各種スポーツ選手の認知スタイルに関する 検討(1)	慶應義塾大学体 育研究所紀要	第39巻、 第1号	2000年1月
田中博史、須田芳正、 川合武司、中島宣行 高橋宏文	バレーボール選手における認知スタイルに 関する研究	スポーツ方法学 研究	第13巻、 第1号	2000年3月
高橋宏文、川合武司、 須田芳正、田中博史	バレーボールにおけるチームワークの検討	スポーツ方法学 研究	第13巻、 第1号	2000年3月

学会発表

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
田中博史、川合武司、 中島宣行、須田芳正、 高橋宏文	チームスポーツ選手における心理特性につ いて—認知スタイルと集中力スタイルの関 係—	第50回日本体育学会	1999年10月
須田芳正、田中博史、 末永尚	サッカー選手における認知スタイルに関す る研究—ポジション別の比較—	第20回サッカー医・科学研 究会	2000年1月
末永尚、須田芳正、 田中博史	サッカー選手のコンディションに関する研 究—簡単な体力テストと自覚的評価との比 較—	第20回サッカー医・科学研 究会	2000年1月

研究教育活動（講演・講師・フィールドワークなど）および社会的活動

内 容	年 月
文部省、国立オリンピック記念青少年総合センター主催生涯スポーツ推進指導者講習会講師	1999年12月

望月康司（助手）

学会発表

氏 名	タイトル	学 会 名	年 月
吉田泰将、植田史生、 佐々木玲子、村山光 義、小森康加、望月 康司、福本修二	剣道の素振りにおける剣先軌跡の三次元的 分析	日本武道学会第32回大会	1999年9月
西園秀嗣、望月康司、 大村靖夫、金高宏文、 山本正嘉	無酸素性パフォーマンスと発育	第53回日本人類学会 Aux- ology 分科会	1999年11月
望月康司、大村靖夫、 奥脇 透、西園秀嗣	アキレス腱長の特徴	第12回トレーニング科学研 究会	2000年3月
小森康加、望月康司、 榎本 至、児玉晋太 郎、前田 明	水球競技における視力矯正がゲーム中のパ フォーマンスに与える影響	第12回トレーニング科学研 究会	2000年3月

2. 研究助成・補助金

氏名	研究テーマ	助成機関	助成額
小森康加、佐々木玲子、植田史生、村松憲	大学スポーツ選手における視力矯正の実態調査—慶応義塾体育会部員を対象に—	慶応義塾学事振興資金 (共同)	79万円
佐々木玲子	複数部位同時使用における動作調整の発達— 両側上肢を用いた動作について—	慶応義塾学事振興資金 (個人)	20万円
野口和行	大学生を対象としたキャンプの効果測定— 自己概念の変容に着目して—	慶応義塾学事振興資金 (個人)	20万円

3. 所内定例研究会発表要旨

体育研究所では、月に1回下記の目的で研究会を行っている。

- 1) 所内の研究の活性化
- 2) 各所員の研究分野の理解
- 3) プロジェクト研究の公表

定例研究会の他、不定期で学会発表の予演会も行っている。これは、体育研究所の教員が学会で発表する時に他の教員にその内容を事前に知ってもらふことや、発表当日までに発表者が内容をさらによく吟味するための教員の応援作業の一貫でもある。ここでは、自由な討論がかわされ発表当人にとって有益に機能する。

以下に、定例で行われた研究会の発表内容について報告する。

第1回 4月13日

(1) 健康関連体力テスト評価プログラム及、ヘルスチェックプログラムの提案

村山 光義

これまで、体育研究所独自の健康関連体力テストの実施とノルム作成を進め、塾生及び教職員へのフィードバックを試みてきた。同様に健康度・ストレスチェック質問紙「ヘルスチェック」を作成し、実施してきた。今後、研究所・トレーニングルームの一機能として定着・発展させるため、パソコンを利用したフィードバックシステムの導入、健康評価プログラムの継続的な検討・改良が重要である。本研究の目的は、健康関連体力テストおよびヘルスチェックの、フィードバックシステムとして、パソコンによる評価プログラムを作成することであった。作成したプログラムは以下の流れを持つ。1. パソコンの起動およびプログラム起動、2. メニュー画面からの処理実行（健康関連体力テストおよびヘルスチェック各2パターン）、3. 4パターン別の入力画面、5. データの記録（複写）、6. プリントアウト、7. 保存、8. メニュー画面へ復帰、9. 終了。健康関連体力テストおよびヘルスチェックの入力結果は、個人プロフィール、個人データ、データの5段階評価、評価グラフを含むフォームで印刷され、健康関連体力テストについては5段階評価別のコメント、ヘルスチェックについては5段階の評価表もレイアウトした。

また、ヘルスチェックにおける、精神的健康度とストレス度、社会的健康度とQOLにはそれぞれ相関関係が認められた。WHOの健康概念から、身体的健康度を健康関連体力で評価し、精神・社会的健康度をストレス・QOLと複合かつ簡略化した質問紙で評価することで2つのテストの融合化をはかり、総合的健康度評価を実施できる可能性が見出された。

以上のように、本プログラムは、トレーニングルーム及び授業等での利用推進に向け、今後改善・発展の余地が有るが、当面、所内統一プログラムとして活用を推進したい。

(2) 週一回の運動継続実施が心身の健康度に及ぼす効果について

佐々木玲子

体育実技が選択科目である本塾においては、特別に運動を行っていない学生にとって、体育実技の授業は身体活動量を確保する唯一の機会であることがこれまでに確かめられている。また一方で、運動の実践は、単に身体の能動的活動機能を向上させることだけに留まらず、精神的側面にも何らかの効果を及ぼすことが指摘されている。本研究では、これまで継続的

に捉えてきた体力的側面に加えて、精神的側面にも着目し、大学の授業として行われている体育実技がその両者を包括し総合的に捉えた心身の健康度に及ぼす影響を明かにすることを目的として測定・調査を行った。

体育実技（エアロビクス）の受講学生を対象として、以下の項目についての測定および調査を行った。

○歩数計、ならびにカロリーカウンターを用いた授業時間内の運動量の測定

○健康関連体力（全身持久性、筋持久力、脚パワー、柔軟性）の測定——1年間を通して2回の測定を含む

○質問紙を用いて精神的側面に関する調査（ヘルスチェック）

○日常の運動行動および運動意識に関する調査

これらの測定および調査項目から次のような結果を得た。

授業実施時の運動量は、1回の運動としては持続時間、強度ともに十分であると考えられた。一年間通して授業を受講した学生について、その体力水準の変化（期間は、約6ヶ月）をみると、どの項目についても全体の平均値に統計的に有意な変化はみられなかった。しかしながら、その2回の測定値の変化を個別に追ってみると、最大酸素摂取量、筋持久力の2項目では2回目に増加した者が多かった。このことから毎時間の授業で必ず行うエアロビクエクササイズ、および筋コンディショニング（腹筋などを含む）エクササイズを継続することによる効果が期待できる可能性が示唆された。また、精神面の健康度は、通年履修者における2回の調査結果の変化からみると、項目の内の、「精神的健康度」が上昇し、「ストレス度」が減少した。本研究における条件下では運動による直接的なストレス軽減効果を指摘することはできないが、長期的に運動を行うことが精神面に何らかの影響をもつ可能性は考えられよう。本研究においては、身体面および精神面を別々の指標として捉えるに留まり、今後心身を総合的に捉えた健康度を測ることの必要性があると思われる。

第2回 5月11日

(1) 陸上競技跳躍選手の下肢形態について

望月 康司

スポーツにおいて競技力を左右する要因の一つに各種目における競技者の形態の違いが挙げられる。簡単な例を挙げると、バレーボールやバスケットボールでは身長、相撲では体重といった項目である。各種目において競技力を左右する形態的特徴を把握することは、指導法またはタレント発掘といった観点からみて重要であると考えられる。本報告では、陸上競技跳躍選手の下肢に着目した。対象はK大学陸上競技部跳躍選手と日本陸連跳躍強化選手であり、これら2群を比較することにより、陸上競技跳躍選手の形態的特徴について検討を試みた。計測項目は中国における一流タレントの科学的選抜に関する報告を参考に下肢長、下腿長、内外踝囲、アキレス腱長を計測した。比較項目は以下のような形態指数として表される。1、2の指数が低いほど、3の指数が高いほど陸上競技跳躍種目においては優れた形態を有しているとされている。

1. (下肢長－下腿長)／下腿長×100； 大腿と下腿の比率を示す

2. (踝囲／アキレス腱長)×100； 踝囲とアキレス腱の比率を示す

3. (アキレス腱長／下腿長)×100； 下腿に対するアキレス腱の比率を示す

以上の項目について、日本陸連強化選手とK大学陸上競技選手を比較した。有意水準は5

%未満とした。1. (下肢長-下腿長)/下腿長×100において、両群で有意な差は認められず、平均値でもほぼ同様の値であった。2. (踵囲/アキレス腱長)×100においては、K大学陸上競技選手が有意に低い値を示した。3. (アキレス腱長/下腿長)×100においては、K大学陸上競技選手が有意に高い値を示した。以上のように3項目中2項目でK大学陸上競技選手が日本陸連強化選手よりも優れた結果となった。陸上跳躍競技で、競技力に影響を及ぼす要因は多く考えられるが、今回の指標だけで考えると、K大学陸上競技跳躍選手は優れた下肢形態を有していることが示唆された。

参考文献：スポーツタレントの科学的選抜、曾凡輝ほか、道和書院、1998。

(2) The analysis of the learning process during one year of tennis serve instruction
(テニスサーブの習熟過程の分析) 村松 憲

The purpose of this study is to investigate the improvement during one year of tennis serve instruction for beginners. The subjects were 8 male university students, who practiced 30 to 40 min twice a week. The following three points were emphasized during the practice period: to enlarge the forward movement of the whole body, to enlarge the whole movement, to stabilize the toss. To judge the effect of practice, we measured the following five items before and after the practice period. 1) ball velocity immediately after impact, 2) horizontal distance of the racket head movement, 3) segmental angles and the inclination angles of the segments at the impact, 4) vertical element of the reaction force (right and left foot), 5) the muscle activation pattern of the muscle triceps brachii and the muscle flexor carpi radialis. These items were also measured for two advanced players. Though the value of each item varied much among 8 beginners before practicing, it became close to those of the advanced players.

第3回 6月15日

(1) キャンプ経験による自己概念の変容 野口 和行

野外教育は、教育の諸目標を達成するために自然や野外を最大限に活用しようとする教育の方法と定義されている。野外教育は、自然の中での活動を通して、1) 自己と自然の関係、2) 自己と他者の関係、3) 自己と自己の関係、4) 自然と自然の関係を見つめ直すことを大きな目的としている。また、組織的キャンプは、野外教育の目的を達成するために、教育的な意図を持って組織的にキャンプを行うことと位置付けられている。

組織キャンプは、従来の集団・組織、固定的活動、目的のあいまいさ、忙しさ、などに代表される定型的なものから、個人・自主性、多様な活動、目的の明確化、ゆとり、などに代表される脱定型的なものへ変化しつつある。最近の組織キャンプでは、環境教育に力点をおいたもの、冒険教育に力点をおいたものの2つが主流になりつつある。環境教育型キャンプは、自然に対する共感的、科学的な理解を深めるプログラムを中心にしたキャンプで、プログラムの内容としては、ネイチャーゲーム、自然観察、水質・土壌調査、林業体験などがあげられる。これらのプログラムを通して、前述した4つの目的のうち、自己と自然の関係、自然と自然の関係に関する効果を期待している。一方、冒険教育型キャンプは、参加者にとって冒険的と感じられるプログラムを中心にしたキャンプで、登山、ロッククライミング、カ

ヤック、ソロビバーク、ロープコース、ASEなどがあげられる。これらのプログラムを通して、自己と他者の関係、自己と自己の関係に関する効果を期待している。

キャンプの効果に関する研究には、概して2つのアプローチがある。一つは自己と自然の関係、自然と自然の関係に関する効果を評価したもので、自然認識、自然に対する態度、感性、environmental Literacy等があげられる。もう一つは自己と他者の関係、自己と自己の関係に関する効果を評価したもので、リーダーシップ、社会性、交友関係、Locus of Control、自己概念等があげられる。

自己概念は、人が自分自身に対して持っている観念、感情、評価の総体と定義されている。キャンプ参加者の自己概念の変容に関する過去の研究としては、長島、梶田が作成した調査票を用いた自己概念の変容に関する研究が行われ、向性因子、達成動機因子、努力主義因子、誠実性因子に優位な変容が見られたことが報告されている。しかし、キャンプのどのプログラムが自己概念の変容に影響を及ぼしているか明らかにされていない。

そこで、慶應義塾大学体育実技「アウトドアレクリエーション」履修者及び慶應義塾高校選択旅行「キャンプ」参加者を対象に自己概念に関する調査を行うこととした。概要は以下のとおりである。

1) 対象

- a) 平成11年度慶應義塾大学体育実技Ⅱ「アウトドアレクリエーション」参加者51名
- b) 平成11年度慶應義塾高校選択旅行「キャンプ」参加者94名

2) 調査票

梶田が作成した自己成長性検査を使用。印象に残ったキャンプのプログラム及びキャンプ場面について3件法で評価。

3) 手続き

- a) 両キャンプ参加者に対してキャンプ前、キャンプ直後、キャンプ終了3ヵ月後に調査を実施。
- b) キャンプ前後の比較、印象に残ったプログラム、キャンプ場面別に比較を行う。

(2) 学生の将来のスポーツ実施の意思とスポーツ・運動活動に関する意識 植田 史生

「学生のスポーツ・運動に関する意識調査」から得られた有効回答数(1043)により、「将来のスポーツ・運動活動を行うかどうか」という設問に対する回答(選択肢よりひとつ選択)から、対象を将来に向けてのスポーツ指向の強さに準じて「積極的实施」、「同様实施」、「消極的实施」、「再開」、「実施否定」の5グループに分けた。本研究においては、主成分分析により分類した13の質問項目群毎にグループ間で分散分析を行い、「学生の将来のスポーツ・運動の実施に対する意思」にはどのような要因が関与するのかを分析、検討した。その結果、1. 現在実施と非実施で差が見られる項目群(再開→実施否定の順で得点が低い)、2. 実施否定のみが得点が低い項目群(再開のためのポイント)、3. その他 の三つの傾向が見られた。1. の項目群には「活動性・自信」、「比較価値」、「友好・協力」、「競技指向」、「意思」の五つの群であった。2. の項目群には「必要性」、「否定・嫌悪」、「効果」の三つの群であった。3. の項目群では、項目群として一定傾向が見られない「環境」、「娯楽」、「健康状態」の三つの群、グループ間に差がない「劣等性」、「生活管理」の二つの群であり、これらにおいては、顕著な傾向は見られなかった。以上の結果から、実際スポーツを行っている者は、

スポーツ・運動に対して積極的な意識を持っているということ、将来実施のポイントは、必要性、効果の認識、嫌悪感を持っていない事等が明らかになった。すなわち、「運動の必要性を認める」「運動実施による体力向上、健康増進への効果を認める」「運動への嫌悪感がない」といったことへの配慮が、我々教員に重要であることが示唆されている。

また、今回の分析から削除した、「現在行っているが将来実施するつもりはない」という者がわずか3名であるということから、現在何かしらのスポーツ・運動活動を行っている者は、ほとんどが将来も行うであろう事が予測される。

第4回 7月6日

(1) 大学バレーボール選手とサッカー選手における認知スタイルに関する研究

須田 芳正

目的：

本研究は、多くのスポーツの中からネット型競技と対人型競技を取り上げ、集団スポーツの中のサッカーとバレーボールを対人競技とネット型競技という分類で比較検討し、両者の認知スタイルの違いを明らかにするとともに、今後の研究および指導の基礎的資料を得ることを目的とした。

被験者：

関東大学サッカー1部、2部に所属する大学サッカー選手86名、東北、関東、東海、九州大学バレーボール1部リーグに所属する大学バレーボール選手100名、総人数186名であった。

結果：

バレーボール選手とサッカー選手の、得点の平均値の差を検定したところ0.1%水準でバレーボール選手の得点に比べサッカー選手の得点が有意に高かった。この結果より、ネット型競技であるバレーボール選手と対人競技であるサッカー選手の認知スタイルにおいては対人競技のサッカー選手に比べネット型競技であるバレーボール選手の方が、場依存型傾向が強いということがわかる。

(2) 全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会の現状と今後について

吉田 泰将

【目的】

これまで実施してきた講習会は対象者を初期40歳以上、平成9年以降30歳以上と地域でこれまで指導されてきた方々とし、優先して受講してもらう暫定措置であった。これがこの先、対象者を20歳以上（文部省基準）に合わせる事となる、そこで過去の講習会で調査したアンケートを元に、今後の講習会のあり方、実施方法などを改善していくために検討を加えることを目的とした。

【方法】

調査対象者：第14回までの受講者1311名有効回答者数1133名。調査方法：質問紙法。調査期日：各講習会最終日。

【結果・考察】

実施期間について、長いと答えた者が20.3%見られるが4泊5日で実施した場合の印象と思われる。参加費用（平均5万円程度）については、25.2%が高いとの印象が見られるが、

受講者の年齢に幅があり、20代後半から30代の者にはかなりの負担となっているものと思われる。カリキュラム（スケジュール）については、過密であると答えた者が62.2%となっている。一日に12時間コマが設けられているため当然の印象と思われる。実施形態については、合宿形態65.4%、単位制・通信教育併用が15.6%となっており、受講者の休暇の取り方などいろいろな要因が関係しているためと思われる。今後文部大臣認定「地域スポーツ指導員・C級（剣道）」の「共通科目」を受講するかどうかについては、60.3%の者が積極的に回答している。平成9年度までに190名が「共通科目」を修了し、文部大臣認定を受けている。

【まとめ】

今後若年層の受講者をより多く集めるために、実施期間をなるべく短く設定できるよう、また参加費用を低く押さえるための方策を取る必要がある。全剣連では、今後通信教育併用の問題、大学において剣道の専門課程を卒業した者への講習・試験の免状規定の確立など早急に進めていく計画である。

第5回 9月20日

(1) 好ましいライフスタイルの確立に向けて

近藤 明彦

大綱化に伴う新カリキュラムにおいて体育研究所の展開する実技科目は学生の嗜好を考え出来る限り多くの者が運動を行えるようにと多彩なものとなっている。しかしながら、体力レベルが低い、技術の伴うスポーツ系科目を不得手である、あるいは何らかの問題であまり過激な運動は出来ないというような学生を対象として考えられた科目は設置されていないのが現状であった。

また、保健管理センターの健康診断の結果では、男子学生の3%が肥満であり、予備群まで含めるとその値は5%に上るといふ。そして肥満の予防・改善のためには食生活の指導ならびに継続的な運動というライフスタイルの改善が必要であることが指摘されている。さらに、スポーツ医学研究センターの調査では、これら肥満の者たちのATレベルはジョギングにはとどかずウォーキング程度であること、またこれらの者を継続的な運動へと導くことはなかなか難しいということが指摘されてきた。

このような背景をもとに、平成12年度よりウォーキング・エクササイズの授業を新たに設置することを提言する。

これにともない、従来からの歩行研究の枠にとらわれない、歩くことによって生起する心身の様々な変化についての検討を行う必要せいが指摘される。すなわち、ウォーキング・エクササイズの捕らえ方を、従来のような「歩けば健康になる」という点のみを強調したものとしてではなく、歩くことから派生する様々な現象（感性の涵養、コミュニケーション、心理的効果など）を取り上げ、その意味を極め、歩くことによりこれらの内容がどのように変化するかを吟味することの必要性が認められるということである。

これらの歩行に関する研究は、本年度発足する日吉研究プロジェクトの一つとして、保健管理センター、スポーツ医学研究センターならびに学外研究協力者との共同研究として発足した。研究の具体的成果は、次回報告する。

第6回 10月12日

(1) 大学スポーツのキャンパスに与える影響を考える

—アメリカの実状を参考にして—

石手 靖

本研究の目的は、単に UCLA (University of California Los Angeles) のスポーツ事情の報告、紹介ではなく、その様々なシステムの根底にある物事の考え方を見出し、わが国の大学でのスポーツ活動の振興に役立てるものである。

UCLA のスポーツエンターテイメントは、UCLA ATHLETICS と UCLA RECREATION、そしてそれらが生み出す UCLA ファンの相互関連がその発展に大きく影響している。

UCLA ATHLETICS のメンバーは各種競技の実践とともに UCLA RECREATION の活動をも支えている。それはアメリカの大学の競技スポーツを統括している NCAA (National Collegiate Athletic Association) の理念に基づくものである。UCLA RECREATION の活動は色々なパターンを持っている。施設の開放、学内競技会の開催、インストラクターを備えたスポーツクラスの設置、キャンパス外の自然を舞台としたプログラム、ジュニアを対象としたスポーツ教室等様々である。

このような活動が UCLA の学生に留まらない多くのファン層をつくりだし、そして彼らが UCLA ATHLETICS と UCLA RECREATION を支援している。

スポーツを普遍的・合理的・機能的なものとし捉えることは、日本とカリフォルニアとの環境の違い（気候、土壌、景観、社会、共同体等）は決して無視できないものではあるが、スポーツの振興にとっては非常に意味のあることと考えられる。

参考文献；

生態学入門：梅棹忠夫・吉良竜夫編 講談社学術文庫

変容する現代社会とスポーツ：日本スポーツ社会学会編 世界思想社

1997-98 NCAA DIVISION I MANUAL: The National Collegiate Athletic Association

和を持って日本となす（上・下）：R. ホワイティング・玉木正之／訳 角川文庫

(2) 平成11年度大学体育指導者夏季中央研修会参加報告書

綿田 博人

内容報告：21世紀の大学教育について

1. 高等教育の現状

① 18歳人口の減少の中、大学・短期大学への進学率 46.2%という高等教育への進学意欲の高まりを積極的に受け止め、学習ニーズの多様化を踏まえ、高等教育機関の多様化とその教育の質的向上との進め方について検討が必要。

② 大学院については、全体としてみれば、欧米諸国に比べて質・量共に水準が低く一層の整備充実と改革が急務。

2. 大学院の役割

① 幅の広い視野、高度の専門性、豊かな人間性を身につけ、国際的な競争力のある、優れた研究者を養成する。

② 高度な専門知識・能力を持ち、フロンティアを開拓することの出来る創造性豊かな人材、起業家精神に富んだ人材を養成する。

3. 学部レベルの高等教育のあるべき姿

① 学習ニーズの多様化、競争的環境を踏まえ、各高等教育機関（大学・短期大学・高専・専門学校）は、自らの理念、目標及び高等教育全体の中で果たすべき役割を明確にし、一層の個性化、質的向上を図る。

② 教育機関の連携により、学生の進路や学習の選択を幅広く認める弾力的な教育制度を実現化する。

4. 大学組織運営の課題

① 狭い伝統的な大学の自治に閉じこもることなく、今日的な学術研究や社会からの要請に的確に応えていくことが必要

② 学部自治の名の下に学問の進歩や社会の変化に対応した改革の推進に支障を生じることなく、学部の枠を超えた自由な議論の場が設けられ、円滑な合意形成が行われることが必要。

第7回 11月30日

(1) 静立時の足底圧力分布状態とスポーツ傷害との関係について

安藤 勝英

【目的】

本研究は、左右足底の圧力分布状態、脚長差、荷重差とスポーツ傷害との関係について報告するものである。この度、開発した足底圧力測定装置は、静立時の左右足の荷重値や重心位置、足底圧力分布図が瞬時に画像として映し出されるシステムになっており、静立状態を足底圧力状態から少なからず知ることができる。これまでの調査において、腰痛や膝痛の傷害者に見られる傾向として立位時、左右のバランスの歪みがみられた。また、ドイツのノートルハイム病院でも腰痛と脚長差に着いて報告がなされている。スポーツ傷害の発症を静立時における体全体のバランスの崩れを一つの要因として考えた場合、静立時の足底圧力分布状態や荷重値の計測できる足底圧力測定装置でも判るのではと考え、その可能性を試みるものである。本報告では、足底圧力測定装置による測定の可能性について、体重の実測値と測定数値の誤差による基準値の設定、また、足底圧力分布図の分類、更にスポーツ傷害との関係について報告する。

【方法】

足底圧力測定装置の上に20秒間静立させ、体重の実測値と測定数値との関係から測定基準値の設定を試みた。

【結果と考察】

① 測定基準値の設定

測定基準値の設定は、円錐形の突起の「つぶれ」を面積に換算する方法を用い、1画素当 A (0.010)、B (0.012)、C (0.014) に設定し、体重と測定値との誤差を検討した結果、Bレベルが最も体重に近い数値を示した。

② 足底圧力分布図の基準設定と分類

足底圧力分布図の基準設定は左右荷重差、横軸重心左右差、縦軸重心位置、縦軸重心左右差の数値から判定を行い、以下の三点支持型、左足加重型、右足加重型、踵加重型、交差加重型、骨変形型の6型に分類した。

③ 足底圧力分布図とスポーツ傷害との関係

腰痛、膝痛、足痛の傷害と足底圧力分布図との関係について検定を行った結果、左足加

重型、右足加重型、踵加重型、交差加重型との間に有意な関係が認められた。

(2) 立位姿勢で重量物を保持した際の筋機能

今栄 貞吉

立位姿勢で両腕を体側にそって自然に下方へ伸ばした状態で重量物を保持した際の筋機能と腕を回内した状態で重量物を保持した際の筋機能の違いについて調べ検討を行なった。

重量物として 5 kg、10kg、16kg、20kg のダンベルを用いた。

筋機能は 前腕伸筋、前腕屈筋、上腕伸筋、上腕屈筋、三角筋、大胸筋について表面電極法により筋電図をとり調べた。

- 1: 立位姿勢で 5 kg、10kg、16kg、20kg のダンベルを保持した際には 前腕屈筋と上腕屈筋、更に三角筋が主に関与している。重量が重くなるにしたがって、前腕屈筋のアイソメトリックな収縮が大きくなるのはもちろん上腕屈筋の関与が更に大きくなり、三角筋、大胸筋も関与してくる。
- 2: 立位、腕回内姿勢で 5 kg、10kg、16kg、20kg のダンベルを保持した際には 前腕屈筋の顕著なアイソメトリックな収縮が起こる。上腕屈筋の関与が小さくなり、かわって三角筋の関与が大きくなる。重量が重くなるにしたがって三角筋の関与が顕著になり、大胸筋も関与してくる。
- 3: 手掌体側側から回内位、回内位から手掌体側側への切り替え時には三角筋が主働筋として大きく関与している。重量が重くなってくると、大胸筋も関与してくる。

(3) ダンス履修学生の重心について

篠原しげ子

二人で組んで踊るダンスの場合、互いに自分のバランスを崩さぬように気をつけなければならない。そのためには重心の位置が重要な意味を持つ。ダンスの履修学生に自分の重心の位置を自覚してもらうために、足低圧力測定装置を用いて測定した。

自分で真っ直ぐに立っていると思う状態をみると、重心は踵から 47.2 パーセントと後方にあり、両足の指が写っていない、使われていない状態であることが分かった。

また本人は真っ直ぐであると思っても、首がうなだれて頭が前に下がっている学生が多く見られるので、頭の位置を背骨の延長上に有るように修整した場合 45.5 パーセントと更に踵寄りになっていた。重い頭をいつもより後ろに持つていくことで重心の動揺も大きくなっているようである。

重心を安定し、前に保つためには、足の指がしっかり機能する必要があるが、足の指が写っていない学生が多く見受けられたことは日常、足の指が使われていないことが伺われる。裸足の状態での測定であるから靴の影響は考えられない。もっと足の指を意識して使うように指示する必要があると思われる。

また、頭をもっと後ろにと指示を出していたが、ますます後傾したバランスで踊っていたわけで、動きがぎこちない理由の一つであったと思われる。指導するときの言葉かけを工夫する必要があると思われる。

第8回 12月7日

(1) 国家とスポーツ

一沖縄国体での「日の丸」焼き討ち事件を手掛かりとして 加藤 大仁

1987年10月26日に沖縄県読谷村で行われた国体少年男子ソフトボール大会開始式で、バックスクリーンのメインポールに掲揚された「日の丸」が引き降ろされ、焼き捨てられるという事件が起こった。この事件は日本国内で唯一地上戦を経験し、戦後の米軍による占領を経て、更には日本復帰後も基地問題を抱える沖縄の特殊事情を表わしていると考えられる。

ところで、オリンピックをはじめとする国際競技会でも、表彰式などで国旗・国歌の掲揚・演奏が行われる。これは国際競技会が、国別対抗戦であるという前提の下に開催されているからだといえる。

しかし、第二次大戦後のアジア・アフリカ諸国の独立や、冷戦終結後の民族・地域問題の噴出により、従来の国家(=19世紀的意味での Nation State)がフィクションの上に成立していたものと認識されるようになってきた。この文脈で考えると、「日の丸」焼き討ち事件や、1995年太田沖縄県知事の代理署名拒否問題などは、中央政府に対する単なるレジスタンスとしてではなく、「日本」という国民国家のフィクション性を再考する題材として捉えられるべきだろう。

(2) スポーツとアンチ・ドーピング

松田 雅之

1960年のローマオリンピック自転車競技でのドーピング事件により行われてきたドーピング規制も、1988年のソウルオリンピックでのベン・ジョンソンの筋肉増強剤使用を期に世界的なアンチ・ドーピングムーブメントへと拡大してきた。しかしながら、日本においては未だにアンチ・ドーピングへの認識は、他の先進国に比べ低いのが現状である。今回は、日本のスポーツ界におけるアンチ・ドーピングの実情について以下の様な報告をした。

世界におけるアンチ・ドーピングの歴史

日本スポーツ界におけるドーピングの歴史

IOC 医事規定と JPN ドーピング・データベースの解説

スポーツとアンチ・ドーピング [全国体育系大学学長・学部長会著]

日本陸上競技連盟のアンチ・ドーピング対策(陸上競技者の為のアンチ・ドーピングハンドブック他)

日本におけるアンチ・ドーピング対策は各スポーツ競技団体によって大きな差があることが実情である。今後の課題は、スポーツ選手のみならず、より多くの日本人(特に中高生)に対しどのようにアンチ・ドーピングへの認識を普及してゆくかが問題となってくる。

(3) 水泳授業中の高校生溺死事故に対する損害賠償請求事件(事例報告) 高嶺 隆二

平成8年8月、某公立高校の水泳授業中に生徒の一人が溺死した事故について、教員に指導上の過失があったとして、その両親から国家賠償法第一条に基づき6千万円余の損害賠償請求がなされた事件(現在係争中、未結審)について、原告の訴状ならびに被告の答弁書をはじめ準備書面、証拠書類をもとに教員の「安全配慮義務違反」の争点について報告した。

事故は、同高校のプール(25m、8コース、水深1.2m)で体育の授業として行われた水泳授業で、水泳技能に大きな差のある生徒(水泳部員から初心者まで)35名を能力別に区分

する事なく、8コース全面に3-6人ずつ混在させ、コース毎に順次間隔を置いて25mを数回泳ぐように指示しスタートさせた直後(1回目)に発生した。事故死した生徒は6コースの4番目にスタートし、スタート地点から17.5m付近の水面にうつ伏せの状態で見失われていたところを同じコースを泳いでいた生徒らに見つけられ、プールサイドに引き上げられた。この時すでに呼吸停止、心臓停止、瞳孔散大の状態であり、救急車で病院に収容されたが蘇生しなかった。警察による検視の結果で死因は溺死と判断された。

本件事故の発生した授業は第4回目に当たり、それ以前の3回の授業では「泳げないもの」10名は1・2コースにまとめて指導を受けていた。当該生徒の水泳技能は、25mの距離を途中で数回立ち止まっては息を整え、泳ぎつなぐ程度の技能であり、それまではこのグループに入っていた。

演者は、この裁判の原告側弁護士からの依頼により、尋問を受けたものである。原告、被告双方の争点は次の通りである。

- (1) 技能に差のある生徒を同時に泳がせたことの是非
 - ・原告 技能に差のある生徒を同時に泳がせたことが原因
 - ・被告 高校生の判断能力からすれば、危険の回避は期待できるので、このことが原因ではない。
- (2) 教員の取った監視行動の是非
 - ・原告 教員は、危険の認識が甘く、監視能力を超えた方法で泳がせた。見学の生徒にも監視役を指示すべきであった。
 - ・被告 生徒同士お互い協力して事故防止を意識して泳ぐように指示していたのであるから、その証拠に生徒らがいち早く異常に気づき救助活動を行っている。通常の水泳指導の慣例からして過失はない。
- (3) 異常事態の認識について
 - ・原告 被害生徒の異常な状態を漫然と見過ごし、危機感をもっていなかった。
 - ・被告 通常溺れる者は、バタバタするか、大声をあげるものであるが、そのようなことは無かった。はじめに気づいた生徒は「ふざけている」と思ったほどで、認識を越える事態が起こったことによるものである。
- (4) 死因の解釈の相違について
 - ・原告 発見が遅れたことによる「溺死」(発見が早ければ助かった)。
 - ・被告 一緒に泳いでいた生徒が、いち早く発見して教員に通報したのであるから不備は無い。極めて短時間のうちに死に至ったことから、死因としては別のことが考えられる。
- (5) 救命活動(体制)について
 - ・原告 事故発生時の救急連絡に時間がかかり、教員の救命手段も悪い。
 - ・被告 いち早く、教員室に連絡して応援を求め養護教員その他の教員が対処したのであり、不備は無い。

高等学校レベルに於ける水泳授業の進め方、とりわけ安全指導に対する対策はどうあるべきかを問う事例である。成人に近い判断能力を有すると解される高校生は、例え水泳能力が未熟であっても危険から自らを救うための危険回避能力があるか。それをあるものという前提で展開される授業は正しいのか。能力に大きな差のある35名の生徒を一人で指導に当たる

教員の守備範囲（責任）はどこまでか。裁判所の判断に興味深く見守りたい。

第9回 1月11日

(1) ハンドボール競技の戦術分析

山内 賢

現在ボールゲームの分析方法は、複数存在する。大きく分類すると3つに分けられ、即時、中期、長期的な分析がそれらのである。ボールゲームを分析する3つの方法を体系的に捉えて、現場へ適用するためには、どのような方法が役立つのかを考えてみたい。今回の発表は、具体的な数値を用いたものではなく、今後ハンドボールの指導に役立てるための準備段階に留まるものである。

これまでの試合分析は、ボールをめぐるプレイに焦点が置かれてきた。それは方法上の問題が絡んでいるから仕方ないことであろう。それゆえに、方法論上の問題を無視して、こんな分析ができたらいいなと思うことを今回は述べてみたい。ハンドボールでは、1人の選手がボールを持ってプレイする時間は、多い選手で5秒から8秒である。つまり、オン・ザ・ボール (On the ball) の局面よりもオフ・ザ・ボール (Off the ball) の局面の方が圧倒的に長いということである。それぞれの選手が、ボールがない時にボールの位置によってどのように動きを変えているか、いつ動き出しているか、さらに、ボールを持った時のプレイの成功をもたらした鍵となるオフ・ザ・ボールの動きは何だったのか、などを解析できるシステムが開発されればハンドボールの質的向上に大きく役立つと思う。

そのためには、ハンドボールの戦術体系をしっかりと把握し、稲垣が示した「球技の戦術における体系化の研究」を洗いなおすとともに、他の競技とハンドボール競技の戦術における類似性と特殊性を今後捉えていくことから始めたいと思う。今、その他の競技のターゲットにしているのは、同じ室内競技であるバスケットボールとフットサルである。そして、何度かこの研究会でも発表したゲーム理論を中期、長期的な分析の方法論としていかに現場に活用するかを模索してみたいと考える。このことは、ハンドボールの戦術体系の確立に関する大きな貢献となりうる。

4. 体育研究所プロジェクト研究について

平成8年度より始められた、体育研究所共同研究プロジェクト、大テーマ「21世紀のスポーツ・健康教育―慶應義塾を発信源として―」は、人文・社会的アプローチ（第1グループ）、自然科学的アプローチ（第2グループ）、スポーツ・健康教育の実践的研究（第3グループ）の各グループに分かれ進められてきている。幅広い視野を持って始められた各グループの取り組みも、3年間の活動を通じ、それぞれの特徴を絞った小テーマの追求に収束してきた。また、人事的な所員交替もあり、新たなメンバーを加え、平成11年初め（前年度）にはメンバーの再構成をするとともに、2000年度（平成12年度）中に本プロジェクトの区切りをつけ、報告書の完成を目指すことが決定した。平成11年度は、これを受け、まず過去3年間の成果と、報告までの期限を考慮した研究計画の再検討が各グループで行われた。以下に11年度中の活動概要をまとめた。（なお、プロジェクト報告書は2000年度内に完成・配布予定である。）

第1グループ：1997年に実施した、「大学生の運動・スポーツ活動に関する意識調査」は、1998年、1999年の2年間にわたる分析、検討の結果を各種学会等で行ってきた。1999年にはこれらの結果をもとに、新たに「大学生のスポーツ・運動行動とその意識に関する調査」の調査用紙の作成ならびにその実施をした。この質問紙では、運動実施に関する「自己効力感」「阻害要因」「自覚的体力」等に関する質問項目群から成っており、前回の調査をさらに推し進める内容のものである。分析結果は、2000年度中に各種学会等に報告の予定である。

また、歴史部門は、塾の大学体育の黎明期に目を向け、創設の経緯、確立までの歴史的事項について、引き続き資料から整理を試みてきている。

第2グループ：自然科学的アプローチを進めている第2グループでは、体育研究所独自の「健康関連体力テスト」確立と質問紙による健康度評価「ヘルスチェック」の作成から両者の融合化による新評価システムの検討してきた。そのため、両者の評価・診断用プログラムを作成し、研究所内トレーニングルームに常設し、トレーニングルーム利用者及び「体力UPコース」「エアロビクス」などの授業参加者のデータ蓄積を継続してきた。最終的な報告に「身体」「精神」「社会」的各健康度評価システムを完成させるべく検討中である。

第3グループ：スポーツ・健康教育の実践的研究を進めている第3グループでは、「スポーツ教育のケーススタディ」として、野外教育を取り上げ、シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」履修者を対象に様々な角度からの授業評価を行ってきた。「スポーツ場面の心理的アプローチ」では、「心理的競技能力診断検査」等のデータ結果からのまとめに入っている状況である。「競技力向上のためのスポーツ教育」「体育会部員対象の体力測定」では、トレーニングルーム開放に伴う体力テストの実施、利用者の体力診断・ヘルスチェックシートのフィードバック等が浸透してきている。体育会部員のトレーニングルーム利用も定着してきている。

第2部 教育分野

概 要

選択制になってからの新カリキュラムも軌道に乗り、毎年度の受講者数もほぼ安定した状況である。しかしながら、塾生に対する体育・スポーツ教育活動の更なる充実をはかるためには、今後取り組むべき問題点がまだ残されていることも否めない。今回は特別な変革事項を示していないが、今後21世紀に向けた新たな展開をするべく、着々とその基礎固めとなる活動を行なっている。

本報告書には、教育分野の資料として以下のものを掲載した。まず、体育研究所設置科目の「体育理論および保健衛生開講科目一覧」「体育実技Ⅰ担当者及び担当科目一覧」、「体育実技Ⅰ履修状況一覧」、「体育実技Ⅱ履修状況一覧」、「学部別体育実技履修状況一覧」である。また、通信教育部夏期スクーリングにおける「体育実技開講科目および担当者一覧」、「体育理論担当者一覧」を載せた。さらに、体育実技のアンケート結果は「体育実技Ⅰ」、「体育実技Ⅱ」それぞれについての結果を掲載した。

1. 体育理論（スポーツサイエンス）と保健衛生（ヘルスサイエンス）

各講義名と担当者及び履修者数を表1-1（体育理論）、表1-2（保健衛生）に示す。

表1-1 平成11年度 体育理論（スポーツサイエンス）のテーマ及び担当者

講義名	コマ数		担当教員	履修者数
	春	秋 計		
スポーツ心理学における俗説と真理	1	1	近藤明彦	27
アウトドアレクリエーションへの招待	1	1	村山光義・野口和行	11
ライフセービング	1	1	山内 賢	14
アスリートのためのスポーツ医・科学	1	1	近藤明彦・佐々木玲子・大西洋平（スポーツ医学研究センター）	35
文化としてのスポーツ論	1	1	綿田博人・松田雅之・植田史生	12
スポーツと身体（からだ）の基礎理論	1	1	吉田泰将	70
競技スポーツにおけるメンタルマネジメント	1	1	近藤明彦	24
健康・体力へのアプローチ	1	1	今米貞吉・安藤勝英・山内 賢	20
スポーツ上達の基礎知識	1	1	植田史生・石手 靖・村山光義	5
スポーツと国家・法	1	1	高嶺隆二・加藤大仁	7

表1-2 平成11年度 保健衛生（ヘルスサイエンス）のテーマ及び担当者

講義名	コマ数		担当教員	履修者数
	春	秋 計		
遺伝、環境と現代病	1	1	南里清一郎	4
知的飲酒のすすめ	1	1	横山裕一	18
医学概論	2	2 4	橋本治雄	25
病気予防とライフスタイル	1	1	辻岡三南子	22
親準備学	1	1 2	木村慶子	24
心臓病の基礎知識	1	1	和井内由充子	2
環境と健康	1	1	斎藤郁夫	7
災難を避けるための医学的基礎	1	1	森 正明	8
健康管理入門	1	1	吉田 正	11

2. 体育実技（スポーツクラス）

体育実技は、Ⅰ（ウィークリースポーツクラス）とⅡ（シーズンスポーツクラス）に分けられる。表2-1にウィークリースポーツクラスの担当者とそれぞれの担当種目、表2-2、3にはそれぞれ、ウィークリースポーツ、シーズンスポーツクラス各種目の履修統計を示す。表2-4には、学部ごとの履修者統計を示す。

表2-1 平成11年度 体育実技Ⅰ（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種目
教 授	橋本 治雄	ゴルフ
"	今栄 貞吉	体力UPコース
"	高嶺 隆二	水泳、体力UPコース
"	近藤 明彦	陸上競技、ジョギング、テニス
"	安藤 勝英	柔道
助 教 授	篠原しげ子	ダンス
"	植田 史生	剣道
"	綿田 博人	野球、ゴルフ
"	松田 雅之	陸上競技、ジョギング、体力UPコース、ニュースポーツ、卓球
"	佐々木玲子	エアロビクス、テニス
専 任 講 師	石手 靖	バレーボール
"	山内 賢	ハンドボール、バスケットボール、ニュースポーツ、体力UPコース
"	吉田 泰将	剣道、体力UPコース
"	加藤 大仁	バスケットボール
"	村山 光義	バレーボール、テニス、フライングディスク
助 手	野口 和行	ニュースポーツ、バレーボール
助手(嘱託)	小森 康加	水泳、エアロビクス
"	須田 芳正	サッカー、フットサル
"	村松 憲	テニス
"	望月 康司	ソフトボール
非常勤講師	上向 貫志	サッカー
"	内田 順	サッカー
"	岡部 英紀	合気道
"	奥村 吾子	ソフトボール
"	加藤 幸司	バドミントン
"	木塚 孝幸	バスケットボール
"	後藤 完夫	アメリカンタッチフットボール
"	小林 徹	バレーボール
"	白井 巧	バドミントン
"	鈴木 智子	エアロビクス
"	砂押 雅夫	ボクシング
"	谷口こゆき	バスケットボール
"	手島智佳子	テニス
"	内藤 尚男	ソフトテニス
"	野口 祥一	弓術
"	長谷場幸雄	ソフトテニス
"	平井 克英	バドミントン
"	保科 喜昭	合気道
"	堀場 雅彦	テニス
"	松本 潔	卓球
"	山田美絵子	バレーボール
"	湯田 秀行	サッカー
"	吉村 和純	ホッケー

表2-2 平成11年度 体育実技 I (ウィークリースポーツクラス) 種目別履修状況

地区	科 目 名	コ マ 数		計	定 員	登 録 数	倍 率	履 修 者 数	充 足 率
		春学期	秋学期						
日 吉 地 区 開 設	アメリカンタッチフットボール	1	1	2	120	41	0.34	43	36%
	エアロビクス	7	11	18	450	384	0.85	325	72%
	ゴルフ	6	6	12	260	338	1.30	240	92%
	サッカー	13	13	26	980	908	0.93	891	91%
	ジョギング	2	2	4	120	62	0.52	71	59%
	ソフトテニス	2	2	4	80	35	0.44	39	49%
	ソフトボール	8	8	16	480	522	1.09	461	96%
	ダンス	4	4	8	160	230	1.44	198	124%
	テニス	14	14	28	620	763	1.23	615	99%
	ニュースポーツ	4	4	8	240	56	0.23	83	35%
	バスケットボール	15	15	30	1080	916	0.85	845	78%
	バドミントン	9	9	18	580	481	0.83	503	87%
	バレーボール	13	13	26	820	497	0.61	542	66%
	ハンドボール	2	2	4	160	60	0.38	65	41%
	フットサル	1	1	2	50	86	1.72	53	106%
	フライングディスク	1	1	2	40	47	1.18	51	128%
	ボクシング	1	1	2	60	78	1.30	64	107%
	ホッケー	1	1	2	80	16	0.20	15	19%
	剣道	8	8	16	320	110	0.34	119	37%
	合気道	1	1	2	60	39	0.65	44	73%
	柔道	3	3	6	180	57	0.32	65	36%
	水泳	10	1	11	350	141	0.40	156	45%
	体力UPコース	8	9	17	390	306	0.78	324	83%
卓球	5	5	10	360	264	0.73	306	85%	
野球	2	2	4	100	98	0.98	106	106%	
陸上競技	2	2	4	120	35	0.29	36	30%	
日吉合計	143	139	282	8260	6570	0.80	6260	76%	
三 田 地 区 開 設	ダンス	1	1	2	60	82	1.37	80	133%
	テニス	3	3	6	76	153	2.01	98	129%
	バレーボール	4	4	8	200	155	0.78	146	73%
	弓術	2	2	4	80	121	1.51	80	100%
	剣道	2	2	4	80	42	0.53	42	53%
	合気道	1	1	2	60	38	0.63	36	60%
	柔道	2	2	4	120	51	0.43	50	42%
	三田合計	15	15	30	676	642	0.95	532	79%
全 体 合 計	158	154	312	8936	7212	0.81	6792	76%	

表2-3 平成11年度 体育実技Ⅱ（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

	月	科目名	担当者	定員	登録数	倍率	許可数	履修者数	充足率
春 学 期	7	アウトドアレクリエーション	吉田 泰将	50	113	2.26	55	63	126%
		アメリカンタッチフットボール	綿引 賢	40	23	0.58	23	29	73%
		空 手	蓮池 陽輔	50	32	0.64	32	36	72%
		器 械 体 操	宮崎 正巳	20	19	0.95	19	22	110%
		弓 術	丸山祐一郎	40	86	2.15	44	45	113%
		硬 式 野 球	後藤 寿彦	40	17	0.43	17	21	53%
		サ ッ カ ー	小森 秀二	50	78	1.56	55	54	108%
	月	少 林 寺 拳 法	中島 正樹	20	13	0.65	13	17	85%
		新 体 操 (女子のみ)	宮崎 正巳	20	15	0.75	15	17	85%
		自 動 車	松山 保幸	70	72	1.03	72	76	109%
		柔 道	安藤 勝英	30	5	0.17	5	11	37%
		水 泳	北村公光嗣	150	52	0.35	52	62	41%
		相 撲	三嶋 明	10	4	0.40	4	4	40%
		卓 球	古谷 修一	60	50	0.83	50	67	112%
		軟 式 野 球	小松 恭三	60	55	0.92	55	66	110%
		馬 術	横山 武次	45	62	1.38	49	51	113%
		バスケットボール	吉川 政宏	75	81	1.08	81	79	105%
		バドミントン	平井 克英	90	118	1.31	98	98	109%
		フ ェ ン シ ン グ	田中由美子	20	11	0.55	11	11	55%
		ホ ッ ケ ー	吉村 和純	40	10	0.25	10	11	28%
ボ ク シ ン グ	砂押 雅夫	30	17	0.57	17	23	77%		
ヨ ッ ト	斎藤 渉	40	39	0.98	39	45	113%		
陸 上 競 技	松田 雅之	30	15	0.50	15	16	53%		
秋 学 期	9	剣 道	清水 誠治	20	9	0.45	9	12	60%
		ア ー チェリー	畠山 雅一	40	39	0.98	39	44	110%
		合 気 道	江口 久	40	36	0.90	36	39	98%
		ウェイトリフティング	武井 澄男	10	2	0.20	2	2	20%
		ゴ ル フ	村山 雅春	60	64	1.07	64	62	103%
		山 岳	岩永 治朗	50	32	0.64	32	38	76%
		ソフトテニス	梶川 則夫	100	20	0.20	20	28	28%
		端 艇	高橋 一栄	30	7	0.23	7	7	23%
		テ ニ ス	堀場 雅彦	80	77	0.96	77	84	105%
		ハンドボール	上西 啓之	30	13	0.43	13	15	50%
	月	バレーボール	竹内 正和	80	56	0.70	56	69	86%
		ラグビー	小野寺 孝	40	19	0.48	19	20	50%
		レスリング	増田 康二	15	6	0.40	6	6	40%
		2	スキ ー	吉田 久男	200	119	0.60	119	131
スケ ー ト	福水 田夫		40	30	0.75	30	34	85%	
		種 目 合 計		1915	1516	0.79	1360	1515	79%

表 2-4 平成11年度 学部別体育実技（スポーツクラス）履修状況

	履修科目数	1年（女子）		2年（女子）		3年（女子）		4年（女子）		履修合計（女子）		延履修数（女子）	
全学部 (文・経・ 法・商・ 医・理)	1科目	556	183	479	142	144	33	138	41	1317	399	1317	399
	2科目	1252	341	664	146	113	42	102	25	2131	554	4262	1108
	3科目	149	53	119	24	23	10	27	5	318	92	954	276
	4科目	124	41	130	26	15	4	11	3	280	74	1120	296
	5科目	10		28	8	4	1	2		44	9	220	45
	6科目	7		18	3	2	1	13	1	40	5	240	30
	7科目	3		8		2	1	2	1	15	2	105	14
	8科目	1		2		1		3	1	7	1	56	8
	9科目			1		1		2		4	0	36	0
	10科目以上			4	1			2		6	1	60	10
合計		2102	618	1453	350	305	92	302	77	4162	1137	8370	2186

	履修科目数	1年（女子）		2年（女子）		3年（女子）		4年（女子）		履修合計（女子）		延履修数（女子）	
文学部	1科目	133	86	41	25	45	21	39	21	258	153	258	153
	2科目	266	158	20	12	30	25	18	6	334	201	668	402
	3科目	51	37	2	2	8	7	7	2	68	48	204	144
	4科目	64	32	1	1	1				66	33	264	132
	5科目	1								1	0	5	0
	6科目	1				1	1	3		5	1	30	6
	7科目	1				1				2	0	14	0
	8科目									0	0	0	0
	9科目									0	0	0	0
	10科目以上									0	0	0	0
合計		517	313	64	40	86	54	67	29	734	436	1443	837

	履修科目数	1年（女子）		2年（女子）		3年（女子）		4年（女子）		履修合計（女子）		延履修数（女子）	
経済学部	1科目	158	34	65	10	15	3	25	1	263	48	263	48
	2科目	190	28	171	16	26	4	23	3	410	51	820	102
	3科目	9		17	3			8	1	34	4	102	12
	4科目	1		36	3	1		4		42	3	168	12
	5科目	1		2	1					3	1	15	5
	6科目	1		3				2		6	0	36	0
	7科目									0	0	0	0
	8科目									0	0	0	0
	9科目							1		1	0	9	0
	10科目以上									0	0	0	0
合計		360	62	294	33	42	7	63	5	759	107	1413	179

	履修科目数	1年 (女子)		2年 (女子)		3年 (女子)		4年 (女子)		履修合計 (女子)		延履修数 (女子)	
法学部 (法律)	1科目	24	6	29	10	20	3	14	4	87	23	87	23
	2科目	96	27	108	44	9	3	20	2	233	76	466	152
	3科目	12	5	18	5	1		5		36	10	108	30
	4科目	24	2	43	16	2	1	3	1	72	20	288	80
	5科目	1		7	2			1		9	2	45	10
	6科目			5	1			1		6	1	36	6
	7科目			1				1		2	0	14	0
	8科目			1						1	0	8	0
	9科目									0	0	0	0
	10科目以上			1				1		2	0	20	0
合 計	157	40	213	78	32	7	46	7	448	132	1072	301	
法学部 (政治)	1科目	69	29	89	49	18	5	22	8	198	91	198	91
	2科目	143	42	91	31	27	7	19	5	280	85	560	170
	3科目	29	6	29	8	7	2	4	1	69	17	207	51
	4科目	23	6	27	2	7	3	1	1	58	12	232	48
	5科目	6		12	5	3	1	1		22	6	110	30
	6科目	3		8	1	1		3	1	15	2	90	12
	7科目	1		5		1	1	1	1	8	2	56	14
	8科目	1		1		1		2	1	5	1	40	8
	9科目			1				1		2	0	18	0
	10科目以上			3	1					3	1	30	10
合 計	275	83	266	97	65	19	54	18	660	217	1541	434	

	履修科目数	1年 (女子)		2年 (女子)		3年 (女子)		4年 (女子)		履修合計 (女子)		延履修数 (女子)	
商学部	1科目	75	22	91	15	9		21	6	196	43	196	43
	2科目	219	38	165	32	8	1	16	6	408	77	816	154
	3科目	9		28	4	2				39	4	117	12
	4科目	7	1	18	3	2		1		28	4	112	16
	5科目			3						3	0	15	0
	6科目							1		1	0	6	0
	7科目	1		1						2	0	14	0
	8科目									0	0	0	0
	9科目									0	0	0	0
	10科目以上									0	0	0	0
合 計	311	61	306	54	21	1	39	12	677	128	1276	225	

	履修科目数	1年 (女子)		2年 (女子)		3年 (女子)		4年 (女子)		履修合計 (女子)		延履修数 (女子)	
医学部	1科目	2		6	1					8	1	8	1
	2科目	5	3	6						11	3	22	6
	3科目									0	0	0	0
	4科目			1						1	0	4	0
	5科目									0	0	0	0
	6科目			1						1	0	6	0
	7科目									0	0	0	0
	8科目									0	0	0	0
	9科目									0	0	0	0
	10科目以上									0	0	0	0
	合計	7	3	14	1	0	0	0	0	21	4	40	7

	履修科目数	1年 (女子)		2年 (女子)		3年 (女子)		4年 (女子)		履修合計 (女子)		延履修数 (女子)	
理工学部	1科目	95	6	158	32	37	1	17	1	307	40	307	40
	2科目	333	45	103	11	13	2	6	3	455	61	910	122
	3科目	39	5	25	2	5	1	3	1	72	9	216	27
	4科目	5		4	1	2		2	1	13	2	52	8
	5科目	1		4		1				6	0	30	0
	6科目	2		1	1			3		6	1	36	6
	7科目			1						1	0	7	0
	8科目							1		1	0	8	0
	9科目					1				1	0	9	0
	10科目以上							1		1	0	10	0
	合計	475	56	296	47	59	4	33	6	863	113	1585	203

3. 通信教育部対象の保健体育科目

(1) 体育実技

平成11年8月2日(月)～8月9日(月)、日曜を除く7日間、日吉キャンパスにて、13:45～16:00に実施した。また、スキーは、平成12年2月11日(金)～15日(火)の4泊5日、長野県飯山市戸狩温泉スキー場にて実施した。

各種目担当者及び履修状況を表3-1に示す。

表3-1 平成11年度通信教育部体育実技スクーリング担当者及び種目一覧

	種 目 名	定 員	履修者数	充足率	担 当 者
夏期	剣 道	30	14	47%	植田史生・吉田泰将
	柔 道	30	5	17%	安藤勝英
	陸 上 競 技	30	7	23%	近藤明彦
	レジャースポーツ	80	39	49%	村山光義・野口和行
	バスケットボール	75	30	40%	加藤大仁・山内 賢
	バレーボール	50	23	46%	石手 靖・須田芳正
	ゴルフ	40	33	83%	村山雅春
	エアロビクス	60	59	98%	佐々木玲子
	ボールルームダンス	25	25	100%	篠原しげ子
	キャリスセニックス	20	20	100%	今栄貞吉
	卓 球	30	29	97%	松田雅之
	水 泳	80	40	50%	高嶺隆二・小森康加
	バドミントン	30	29	97%	村松 憲・加藤幸司
	ソフトボール	40	21	53%	綿田博人・望月康司
冬期	ス キ ー	70	53	76%	水野英夫
	合 計	690	427	62%	

(2) 体育理論

4名の教員によるオムニバス形式で、夏期スクーリング中に7回(1時限100分)行われた。各教員のテーマを表3-2に示す。

表3-2 平成11年度通信教育部総合教育科目
保健体育科目体育理論

テ ー マ	担当教員
健康・体力へのアプローチ	今栄貞吉
スポーツ・身体活動の科学的基礎	近藤明彦
スポーツと文化	安藤勝英
体育・スポーツ事故に対する法的責任	高嶺隆二

また、今年度のレポートならびに試験問題の出題は、松田雅之、吉田泰将、村山光義の3名が担当した。

4. 平成11年度体育実技（スポーツクラス）履修者アンケート集計結果

体育研究所では、より適切な授業展開のための基礎的資料を得ることを目的に、体育実技履修学生による授業に対する評価（アンケート）を実施している。その結果を、ウィークリースポーツクラス（春・秋学期）、シーズンスポーツクラスに分けて示した。アンケートの回答数および各質問項目の具体的内容は、それぞれ表4-1、2に示したとおりである。

表4-1 アンケート回答者数

	アンケート総数
ウィークリー春学期	2110
ウィークリー秋学期	1678
シーズン	900

表4-2 アンケート項目

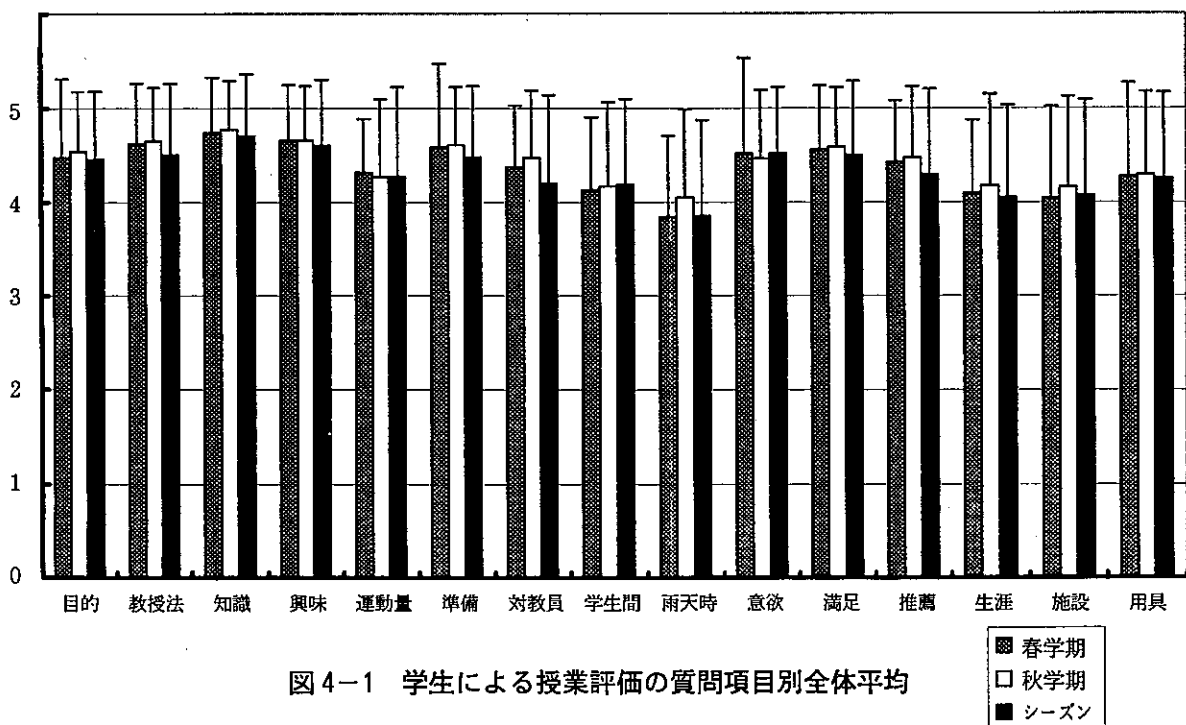
1	目的	: 授業の目的目標はよく理解できた
2	教授法	: 教員の教授方法は適切であった
3	知識	: 教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
4	興味	: 授業の内容は興味のあるものであった
5	運動量	: 運動量は十分であった
6	準備	: 教員の授業に対する準備は十分であった
7	対教員	: 授業において教員とのコミュニケーションはよく取れた
8	学生間	: 授業において学生間のコミュニケーションはよく取れた
*9	雨天時	: 雨天時のプログラムは適切であった
10	意欲	: 自分はこの授業に意欲的に取り組んだ
11	満足	: この授業は自分にとって満足できるものであった
12	推薦	: この授業を他の学生にも薦めたい
13	生涯	: この種目を生涯スポーツとして取り入れたい
14	施設	: 利用施設は十分であった
15	用具	: 用具は十分であった
**16	費用	: 実技費用はどうか
**17	集合	: 集合方法はどうか

* 屋外実施種目のみ対象とする項目
** 合宿種目のみ対象とする項目

アンケートの各項目について、1から5の項目に関しては、「強く思う」を5点、「思う」を4点、「どちらともいえない」を3点、「そう思わない」を2点、「まったく思わない」を1点として得点化することにより5段階評価をした。また、合宿種目については、「費用」と「集合場所」（項目16と17）についても加えて尋ね、それぞれ「安い」を3点、「普通」を2点、「高い」を1点、「良い」を3点、「普通」を2点、「悪い」を1点として得点化することにより、3段階評価をした。

図4-1は、各項目ごと、ウィークリースポーツクラス（春・秋学期）、シーズンスポーツクラスの別に全体の平均値と標準偏差を示したものである。また、合宿種目のみの質問項目（「費用」「集合場所」）に対する結果を図4-2に示した。

全般に4点以上の肯定的評価がほとんどであった。但し、雨天時の運動プログラムの1項目のみが昨年度同様4点を下回っており、今後検討すべき事項であるといえよう。また、合宿を伴う種目に関しては、アウトドアクリエーションとスケートを除いて、費用が高いと感じているようである。集合場所に関しては、スキーとアウトドアクリエーションで、集合場所（現地集合）にやや不満を感じている傾向がみられた。



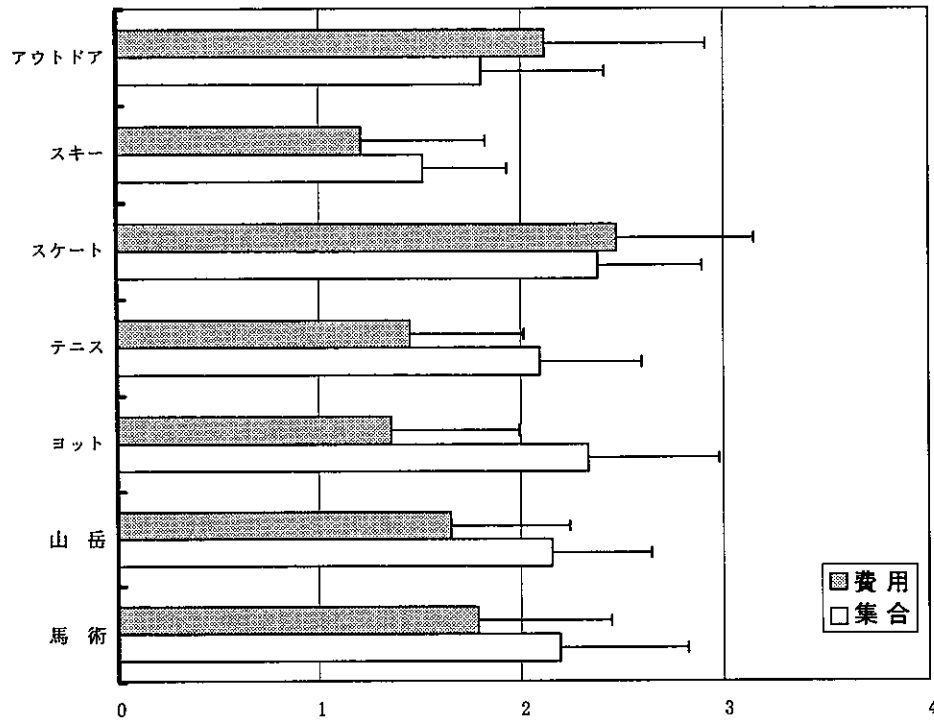


図4-2 合宿種目における費用と集合場所の3段階評価

さらに、ウィークリースポーツクラス（春・秋学期）、シーズンスポーツクラス各々について、種目別にみた5段階評価を表4-3～5に示した。

表4-3 5段階評価種目別集計一覧 (ウィークリー春学期)

種目	名	n	目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	雨天時	意欲	満足	推薦	生涯	施設	用具
エアロビクス		平均	4.6	4.8	4.8	4.7	4.4	4.8	4.4	3.8		4.6	4.6	4.6	4.1	4.1	4.3
		105 sd	0.5	0.4	0.4	0.5	0.8	0.4	0.7	0.9		0.6	0.5	0.6	0.9	1.0	0.7
サッカー		平均	4.5	4.6	4.8	4.8	4.6	4.5	4.3	4.1	4.0	4.6	4.7	4.6	4.4	3.8	4.3
		266 sd	0.6	0.6	0.5	0.7	0.7	0.7	0.8	0.9	1.0	0.6	0.6	0.7	0.8	1.1	0.8
ジョギング		平均	4.3	4.3	4.6	4.2	3.9	4.3	4.2	3.8	3.8	4.3	4.3	4.2	4.3	4.2	4.0
		20 sd	0.7	0.7	0.8	0.9	1.0	0.9	0.8	1.0	0.8	0.7	0.8	1.0	0.9	0.9	0.9
ソフトラニクス		平均	4.7	4.7	4.8	4.7	4.4	4.7	4.6	4.3	4.1	4.7	4.7	4.3	4.5	4.5	4.6
		17 sd	0.5	0.6	0.6	0.6	0.9	0.6	0.7	0.8	0.9	0.5	0.6	1.0	0.8	0.7	0.7
ソフトボール		平均	4.3	4.6	4.7	4.6	4.0	4.5	4.5	4.2	3.8	4.5	4.5	4.5	3.6	3.9	3.9
		172 sd	0.7	0.5	0.5	0.6	0.9	0.6	0.7	0.8	1.0	0.7	0.7	0.7	1.0	1.0	1.0
ダンス		平均	4.5	4.4	4.8	4.5	3.8	4.6	4.0	4.2		4.3	4.2	4.2	3.9	3.7	3.7
		93 sd	0.6	0.6	0.6	0.7	1.0	0.7	0.8	0.8		0.8	0.8	1.0	1.0	1.1	1.0
テニス		平均	4.5	4.7	4.7	4.7	4.1	4.6	4.5	4.2	3.7	4.5	4.6	4.5	4.6	4.0	4.3
		149 sd	0.6	0.5	0.6	0.5	0.8	0.6	0.7	0.8	0.9	0.7	0.6	0.6	0.6	0.9	0.7
ニュースポーツ		平均	4.5	4.8	4.6	4.6	3.9	4.6	4.7	4.4	4.2	4.4	4.6	4.7	3.6	3.7	4.2
		37 sd	0.7	0.5	0.8	0.7	1.0	0.6	0.6	0.7	1.0	0.7	0.6	0.5	1.1	1.1	0.9
バスケットボール		平均	4.4	4.6	4.7	4.7	4.5	4.6	4.2	4.2		4.6	4.6	4.4	4.1	4.2	4.5
		305 sd	0.7	0.7	0.6	0.5	0.8	0.6	0.9	0.8		0.7	0.6	0.8	1.0	0.9	0.7
バドミントン		平均	4.5	4.7	4.8	4.7	4.5	4.7	4.3	4.3		4.5	4.5	4.4	4.1	4.3	4.4
		188 sd	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.6	0.8	0.8		0.6	0.6	0.7	0.9	0.8	0.8
バレーボール		平均	4.4	4.6	4.6	4.7	4.4	4.5	4.6	4.4	3.6	4.6	4.7	4.5	4.0	3.9	4.2
		235 sd	0.7	0.6	0.7	0.6	0.8	0.7	0.6	0.7	1.2	0.6	0.6	0.7	1.0	1.1	0.9
ハンドボール		平均	4.4	4.6	4.9	4.5	4.8	4.5	4.3	4.1		4.6	4.4	3.9	3.5	4.1	4.3
		27 sd	0.6	0.5	0.4	0.5	0.4	0.9	0.7	0.9		0.6	0.8	1.1	1.1	0.9	0.9
フットサル		平均	4.6	4.9	4.8	4.8	4.9	4.7	4.5	4.1		4.9	4.8	4.6	4.1	3.6	4.1
		14 sd	0.5	0.4	0.6	0.4	0.4	0.5	0.5	0.7		0.4	0.4	0.6	0.9	1.0	0.9
フライングディスク		平均	4.1	4.4	4.8	4.2	3.4	4.5	3.6	3.4	3.3	4.0	4.0	4.1	3.1	3.9	4.2
		19 sd	0.8	0.5	0.4	0.9	1.2	0.7	0.8	0.7	1.0	0.9	0.9	0.9	0.9	1.0	0.8
ボクシング		平均	4.4	4.9	4.9	4.9	4.9	4.7	4.5	3.8		4.5	4.4	4.5	3.8	3.9	3.7
		21 sd	0.6	0.4	0.3	0.3	0.5	0.5	0.7	0.8		0.7	0.7	1.0	0.9	1.0	1.1
水泳		平均	4.7	4.7	4.8	4.7	4.4	4.7	4.6	4.3	4.1	4.7	4.7	4.7	4.3	4.5	4.5
		84 sd	0.5	0.6	0.6	0.6	0.9	0.6	0.7	0.8	0.9	0.5	0.6	1.0	0.8	0.7	0.7

種目	名	n	目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	雨天時	意欲	満足	推薦	生涯	施設	用具
弓	術	平均	4.6	4.7	5.0	4.9	3.8	4.7	4.3	3.7	3.7	4.6	4.6	4.6	4.5	4.7	4.6
		20 sd	0.7	0.6	0.2	0.5	1.1	0.6	1.0	1.0	1.0	0.6	0.8	0.8	0.9	0.6	0.8
剣	道	平均	4.4	4.8	5.0	4.7	4.2	4.7	4.6	4.3	4.3	4.4	4.5	4.3	4.0	4.6	4.6
		69 sd	0.6	0.5	0.2	0.5	0.7	0.6	0.5	0.8	0.8	0.7	0.6	0.8	1.0	0.5	0.6
合	気	平均	4.4	4.7	4.7	4.8	4.2	4.7	4.9	4.0	4.0	4.5	4.6	4.6	3.8	4.3	4.6
		27 sd	0.8	0.6	1.1	0.5	0.8	0.5	0.4	0.9	0.9	0.7	0.6	0.7	0.9	0.7	0.6
柔	道	平均	4.7	4.9	4.9	4.8	4.6	4.7	4.8	4.6	4.6	4.4	4.8	4.6	4.6	4.5	4.6
		14 sd	0.6	0.5	0.5	0.6	0.9	0.6	0.6	0.8	0.8	1.2	0.6	0.7	0.5	0.9	0.7
体	力	平均	4.7	4.8	4.9	4.6	4.1	4.8	4.4	3.3	3.3	4.4	4.6	4.6	4.4	4.5	4.4
	ア	111 sd	0.5	0.4	0.3	0.5	0.9	0.6	0.7	1.0	1.0	0.7	0.6	0.7	0.9	0.6	0.6
卓	球	平均	4.5	4.4	4.6	4.4	4.1	4.4	4.0	4.0	4.0	4.3	4.3	4.1	4.0	3.4	3.8
		86 sd	0.6	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8	0.9	0.8	0.8	0.8	0.7	0.9	1.1	1.2	1.0
陸	上	平均	4.5	4.7	4.9	4.8	4.0	4.7	4.5	4.3	4.5	4.7	4.7	4.1	3.5	3.8	4.2
	競	13 sd	0.5	0.5	0.3	0.4	0.7	0.5	0.5	0.8	0.7	0.5	0.5	0.9	0.5	0.9	0.7
野	球	平均	3.96	4.07	4.56	4.33	3.74	4.19	3.52	3.67	3.35	4.33	4.04	3.78	4.22	4.37	4.59
		n=27 sd	0.76	0.87	0.58	0.83	1.16	0.88	0.85	1.00	1.50	0.73	0.98	1.09	0.80	0.69	0.57
ラ	ク	平均	4.26	4.65	4.55	4.45	4.55	4.52	4.58	4.52	4.06	4.61	4.58	4.61	3.68	4.19	4.45
	ロ	n=31 sd	0.89	0.61	0.96	0.93	0.93	0.68	0.67	0.72	1.18	0.72	0.67	0.72	1.51	1.05	0.89
陸	上	平均	3.91	4.55	4.55	4.45	3.91	4.45	4.18	4.27	3.88	4.55	4.73	3.82	3.73	4.45	4.55
	競	n=11 sd	0.83	0.52	1.04	0.52	0.54	0.52	0.75	0.79	1.36	0.69	0.47	1.25	0.79	0.69	0.69

表4-4 5段階評価種目別集計一覧(ウィークリー秋学期)

種目	名	n	目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	雨天時	意欲	満足	推薦	生涯	施設	用具
アメリカン	タッチ	フット	平均	4.8	4.9	5.0	4.9	4.7	4.8	4.8	4.6	3.4	4.8	4.9	4.8	4.1	4.3
		12 sd		0.4	0.3	0.0	0.3	0.5	0.5	0.4	0.7	0.9	0.4	0.3	0.6	0.9	0.8
エア	ロビ	クス	平均	4.6	4.8	4.8	4.7	4.4	4.8	4.4	3.9	4.5	4.7	4.7	4.1	4.4	4.3
		129 sd		0.6	0.4	0.5	0.6	0.7	0.6	0.7	0.9	0.7	0.5	0.5	0.9	0.7	1.0
キャリア	セニ	ックス	平均	4.9	4.9	4.9	4.8	4.3	4.9	4.7	3.7	4.3	4.7	4.7	4.3	4.5	4.5
		54 sd		0.4	0.3	0.3	0.4	0.7	0.3	0.5	0.9	0.9	0.5	0.5	0.8	0.7	0.6
ゴルフ			平均	4.4	4.5	4.6	4.5	4.1	4.4	4.0	4.3	4.5	4.5	4.4	4.4	4.4	4.8
		34 sd		0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.6	1.0	0.7	0.7	0.6	0.6	0.7	0.7	0.4
サッカー			平均	4.6	4.7	4.8	4.8	4.6	4.6	4.4	4.1	3.9	4.6	4.7	4.6	4.6	4.3
		170 sd		0.6	0.5	0.4	0.5	0.7	0.7	0.8	0.8	1.0	0.6	0.6	0.7	0.8	1.0
ジョギング			平均	4.4	4.4	4.6	4.3	3.9	4.3	4.3	3.8	3.6	4.3	4.1	3.9	4.2	4.3
		18 sd		0.6	0.6	0.7	0.8	1.0	0.7	0.8	0.9	0.8	0.6	0.7	1.0	1.0	1.3
ソフト	テニス		平均	4	4.4	4.5	4.6	4.1	4.6	4.5	4.2	3.6	4.4	4.7	4.3	3.7	4.5
		11 sd		0.9	0.9	0.5	0.5	0.9	0.5	0.5	0.6	0.9	0.8	0.5	1.0	1.1	0.5
ソフト	ボール		平均	4.5	4.7	4.7	4.7	4.2	4.7	4.7	4.4	3.8	4.6	4.7	4.6	3.7	4.2
		139 sd		0.7	0.5	0.6	0.5	0.8	0.5	0.6	0.7	1.0	0.6	0.6	1.0	0.9	0.7
ダンス			平均	4.5	4.4	4.6	4.4	3.8	4.5	4.1	4.1	4.3	4.3	4.1	3.9	3.7	3.8
		76 sd		0.6	0.7	0.7	0.7	1.0	0.6	0.9	0.9	0.7	0.7	0.9	1.0	0.9	0.8
テニス			平均	4.5	4.7	4.8	4.6	4.0	4.5	4.5	4.2	3.9	4.4	4.6	4.5	4.6	4.2
		174 sd		0.7	0.5	0.4	0.6	0.8	0.6	0.6	0.8	0.9	0.7	0.6	0.7	0.6	0.8
ニュース	ポーツ		平均	4.3	4.7	4.7	4.6	3.6	4.6	4.8	4.5	4.4	4.5	4.6	4.6	3.8	4.5
		19 sd		0.7	0.5	0.5	0.6	1.1	0.5	0.4	0.8	0.8	1.0	0.6	0.5	0.9	0.5
バスケット	ボール		平均	4.6	4.7	4.7	4.7	4.6	4.6	4.5	4.2	4.6	4.7	4.7	4.5	4.2	4.2
		220 sd		0.6	0.6	0.6	0.5	0.8	0.6	0.7	0.9	0.7	0.6	0.8	1.0	1.0	0.9
バドミントン			平均	4.4	4.5	4.8	4.6	4.4	4.6	4.4	4.2	4.4	4.4	4.5	4.3	4.1	4.3
		141 sd		0.6	0.7	0.5	0.6	0.7	0.6	0.8	0.9	0.8	0.8	0.9	1.0	0.8	0.9
バレー	ボール		平均	4.6	4.6	4.8	4.7	4.2	4.6	4.6	4.3	3.9	4.5	4.6	4.5	4.1	3.9
		171 sd		0.6	0.6	0.5	0.6	0.8	0.7	0.7	0.8	1.0	0.7	0.6	0.7	1.1	1.1
ハンド	ボール		平均	4.8	4.7	4.8	4.6	4.4	4.6	4.6	4.6	4.7	4.5	4.6	4.6	3.7	4.0
		11 sd		0.4	0.6	0.4	0.5	0.8	0.7	0.7	0.7	0.5	0.7	0.5	1.0	1.2	0.8
フット	サル		平均	4.8	4.9	5.0	5.0	4.8	4.8	4.6	4.4	4.6	4.6	4.6	4.4	4.3	3.9
		8 sd		0.5	0.4	0.0	0.0	0.5	0.5	0.5	0.7	0.5	0.5	0.5	1.2	0.8	0.7

種目名	n	目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	雨天時	意欲	満足	推薦	生涯	施設	用具
フライングディスク	平均	4.5	4.6	4.9	4.5	4.3	4.8	4.4	4.0	3.6	4.2	4.4	4.3	3.6	3.8	4.4
	15 sd	0.6	0.6	0.4	0.7	0.9	0.4	0.6	0.9	1.1	0.7	0.7	0.8	0.9	1.0	0.6
ボクシング	平均	4.5	4.6	4.9	4.8	4.5	4.8	4.5	4.1		4.5	4.6	4.3	3.8	3.8	3.9
	16 sd	0.5	0.6	0.5	0.4	0.8	0.4	0.5	0.6		0.5	0.7	1.3	0.9	1.1	1.2
弓術	平均	4.7	5.0	5.0	4.9	4.0	4.9	4.4	4.1		4.4	4.8	4.7	4.4	4.7	4.6
	27 sd	0.5	0.2	0.0	0.3	0.8	0.4	0.6	0.8		0.7	0.4	0.5	0.9	0.6	0.8
剣道	平均	4.6	4.9	5.0	4.7	4.2	4.7	4.7	4.5		4.3	4.7	4.4	4.3	4.8	4.7
	51 sd	0.5	0.2	0.0	0.6	0.9	0.5	0.6	0.8		0.9	0.5	1.0	1.0	0.5	0.5
合気道	平均	4.4	4.7	4.7	4.7	4.1	4.6	4.6	4.4		4.4	4.6	4.6	3.8	4.5	4.5
	28 sd	0.7	0.5	0.8	0.6	0.9	0.7	0.7	0.9		0.8	0.6	0.6	1.0	0.6	0.6
柔道	平均	4.6	4.7	4.9	4.9	4.6	4.6	4.8	4.5		4.4	4.6	4.3	4.2	4.1	4.0
	28 sd	0.7	0.7	0.6	0.4	0.5	0.7	0.4	1.0		0.6	0.6	0.8	0.8	0.9	1.0
体力アップコース	平均	4.6	4.5	4.6	4.5	4.0	4.4	4.4	3.3		4.1	4.2	4.2	4.0	4.3	4.1
	36 sd	0.6	0.7	0.7	0.5	0.8	0.7	0.7	0.8		0.8	0.8	0.7	0.9	0.8	0.9
卓球	平均	4.3	4.4	4.6	4.4	3.9	4.4	4.2	4.0		4.3	4.4	4.2	4.0	3.8	4.0
	61 sd	0.8	0.6	0.6	0.7	1.0	0.7	0.8	1.1		0.7	0.7	0.8	0.9	1.0	0.9
野球	平均	4.6	4.7	4.9	4.2	4.1	4.2	4.5	4.2	4.3	4.7	4.3	3.8	4.2	4.7	4.7
	15 sd	0.5	0.5	0.4	0.8	0.5	0.9	0.5	1.3	0.8	0.5	1.3	1.2	1.3	0.6	0.5
陸上競技	平均	4.3	4.6	4.9	4.7	4.1	4.3	4.5	4.3	3.6	4.3	4.3	3.9	3.7	4.5	4.4
	12 sd	0.7	0.7	0.3	0.5	0.5	0.9	0.7	1.2	0.7	1.1	0.7	1.2	1.2	0.7	0.7
ホッケー	平均	3.0	3.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	3.0	3.0	4.0	4.0	4.0	2.0	4.0	4.0
	sd															

表 4-5 5 段階評価種目別集計一覧（シーズンスポーツ）

種目	名	n	目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	対教員	学生間	雨天時	意欲	満足	推薦	生涯	施設	用具	費用	集合
ア	ウト	ア	平均	4.6	4.8	4.7	4.5	4.6	4.5	4.3	4.0	4.5	4.7	4.5	3.7	4.4	4.6	2.1	1.8
		48	sd	0.5	0.6	0.5	0.7	0.6	0.6	0.8	0.8	0.5	0.6	0.7	0.9	0.8	0.7	0.6	0.8
ア	メリカ	ン	平均	4.4	4.6	4.5	4.2	4.6	4.5	4.4	3.9	4.4	4.4	4.6	3.9	4.2	4.6		
		25	sd	0.8	0.8	0.9	0.7	0.7	0.6	1.0	0.8	0.9	0.8	0.5	0.8	0.8	0.6		
ゴ	ル	フ	平均	4.0	4.4	3.9	3.4	3.8	3.6	3.5	3.9	4.1	4.1	4.3	4.5	3.8	3.9		
		34	sd	0.8	1.1	0.9	1.1	1.0	1.3	1.2	0.8	0.9	1.1	1.1	0.5	1.1	0.9		
サ	ッ	カ	平均	4.9	4.9	5.0	4.6	4.7	4.5	4.4	3.8	4.7	4.9	4.7	4.7	4.1	4.5		
		23	sd	0.3	0.4	0.2	0.8	0.5	0.9	0.9	1.3	0.5	0.3	0.5	0.6	1.1	0.8		
ス	キ	一	平均	4.3	4.6	4.5	4.5	4.4	4.2	4.5	4.5	4.6	4.4	3.9	4.3	4.1	4.2	1.2	1.5
		100	sd	0.8	0.9	0.8	0.8	0.8	1.0	0.7	0.7	0.6	0.8	1.1	0.9	0.9	0.9	0.4	0.6
ス	ケ	一	平均	4.8	5.0	5.0	4.6	4.7	4.5	4.3	4.3	4.9	4.8	4.6	4.4	4.8	4.6	2.5	2.4
		21	sd	0.4	0.0	0.2	0.9	0.6	0.7	0.8	0.8	0.4	0.5	0.7	0.8	0.5	0.7	0.5	0.7
相	撲	平均	4.7	4.3	4.3	3.7	4.7	4.7	4.7	5.0	5.0	4.3	4.3	4.0	3.7	4.0	4.0		
		3	sd	0.6	1.2	1.2	1.2	0.6	0.6	0.0		0.6	1.2	1.0	1.2	1.0	1.0		
ソ	フト	ニ	平均	4.1	4.3	4.5	4.5	4.3	4.2	4.2	4.3	4.5	4.4	4.3	3.8	4.5	4.5		
		11	sd	1.1	1.1	0.8	0.7	0.9	0.9	1.0	0.9	0.8	0.8	0.9	1.1	0.7	0.7		
テ	ニ	ス	平均	4.3	4.4	4.4	4.6	4.3	4.1	4.1	4.1	4.3	4.4	4.3	4.5	4.2	4.4	1.5	2.1
		53	sd	0.8	0.9	1.1	0.9	0.9	1.0	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.8	0.7	0.9	0.5	0.6
バ	ス	ケ	平均	4.4	4.6	4.7	4.5	4.5	4.0	4.4	4.4	4.6	4.3	4.2	4.3	3.9	4.1		
		42	sd	0.7	0.7	0.4	0.8	0.8	1.1	0.9	0.9	0.6	1.1	1.3	1.1	1.3	0.9		
バ	ト	ミ	平均	4.5	4.8	4.6	4.5	4.6	3.8	3.9	3.9	4.4	4.5	4.4	4.1	4.3	4.2		
		76	sd	0.6	0.7	0.5	0.7	0.6	0.9	0.9	0.9	0.8	0.7	0.8	0.9	0.8	0.9		
バ	レ	一	平均	4.4	4.6	4.7	4.4	4.5	3.9	4.4	3.8	4.8	4.6	4.5	4.2	2.9	3.6		
		38	sd	0.9	0.7	0.6	0.9	0.6	1.2	0.7	1.0	0.5	0.8	0.7	0.9	1.0	1.1		
ハ	ン	ド	平均	4.3	4.7	4.1	4.8	4.3	4.1	3.6	3.6	4.1	3.9	3.0	2.7	4.0	4.3		
		7	sd	0.5	0.8	0.5	0.7	0.5	0.7	0.8	0.8	0.7	0.7	1.2	1.0	0.6	0.5		
フ	ェ	ン	平均	4.6	4.9	4.8	5.0	5.0	5.0	4.6	4.6	4.8	4.9	4.9	4.4	4.6	4.8		
		8	sd	0.5	0.4	0.5	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.9	0.5	0.5		
ポ	ク	シ	平均	4.4	4.9	4.9	4.8	4.7	4.4	3.5	3.5	4.3	4.7	3.9	3.3	4.1	4.2		
		15	sd	0.6	0.4	0.4	0.4	0.5	0.7	0.6	0.6	0.7	0.5	0.8	1.0	0.7	0.7		
ホ	ッ	ケ	平均	4.8	4.8	4.5	4.3	5.0	4.8	4.5	4.3	4.5	4.0	4.3	3.8	5.0	5.0		
		4	sd	0.5	0.5	1.0	1.0	0.0	0.5	0.6	1.2	1.0	1.4	1.0	1.0	0.0	0.0		

種目	名	n	目的	教授法	知識	興味	運動量	準備	對教員	學生間	雨天時	意欲	満足	推薦	生涯	施設	用具	費用	集合
ヨ	ッ	平均 36 sd	4.0	4.2	4.5	4.5	3.0	4.2	3.9	4.3	3.3	4.4	3.6	4.0	2.9	3.7	4.3	1.4	2.3
ラ	ビ	平均 10 sd	1.2	0.9	1.0	0.8	1.3	1.0	1.0	0.8	1.1	0.7	1.0	0.9	1.0	1.0	0.7	0.6	0.6
器	械	平均 11 sd	4.8	4.5	4.8	4.7	4.5	4.3	4.6	3.7	3.8	4.6	4.8	4.7	3.7	4.6	4.6		
弓	術	平均 22 sd	0.4	0.5	0.4	0.5	0.8	0.5	0.7	0.9	0.8	0.5	0.4	0.7	1.2	0.5	0.5		
空	手	平均 24 sd	4.5	4.7	4.9	4.7	3.8	4.5	4.6	4.5	4.5	4.7	4.6	4.6	4.0	4.0	3.9		
劍	道	平均 9 sd	0.7	0.5	0.4	0.6	1.2	0.6	0.6	0.7	0.7	0.5	0.7	0.7	0.9	0.8	1.0		
合	道	平均 19 sd	4.7	4.8	5.0	5.0	4.8	4.8	4.6	4.4	4.8	4.8	4.8	4.6	4.2	4.5	4.6		
山	岳	平均 20 sd	0.6	0.4	0.0	0.2	0.4	0.5	0.6	0.9	0.9	0.5	0.5	0.7	0.9	0.8	0.6		
自	動	平均 50 sd	4.3	5.0	4.9	4.9	4.4	4.7	3.7	3.6	3.6	4.4	4.4	4.0	4.0	4.3	4.6		
柔	道	平均 10 sd	0.5	0.0	0.3	0.3	0.9	0.7	0.5	0.9	0.8	0.7	0.5	0.7	0.9	0.5	0.5		
少	林	平均 12 sd	4.5	4.6	4.9	4.7	4.1	4.9	4.6	3.6	4.3	4.7	4.9	4.4	4.4	4.4	4.7	1.7	2.2
新	體	平均 9 sd	0.6	0.7	0.6	0.6	1.1	0.7	0.6	0.8	0.9	0.8	0.7	0.9	0.8	1.0	1.1		
水	泳	平均 36 sd	4.8	5.0	5.0	5.0	4.7	4.8	4.9	4.8	4.8	4.7	4.9	5.0	4.2	4.4	4.4		
卓	球	平均 41 sd	0.4	0.0	0.0	0.0	0.9	0.4	0.3	0.4	0.4	0.7	0.3	0.0	1.0	0.8	0.8		
軟	式	平均 36 sd	4.7	4.9	4.9	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7	4.1	4.7	4.8	4.1	4.4	4.1	4.4		
馬	術	平均 41 sd	0.6	0.5	0.2	0.6	0.6	0.4	0.5	0.8	1.2	0.6	0.6	1.2	0.8	1.1	0.7		
陸	上	平均 6 sd	4.1	3.7	4.1	3.8	3.7	3.8	3.0	4.2	4.2	4.1	4.0	3.6	3.3	3.1	3.5		
			0.8	1.0	0.9	0.8	1.0	0.8	1.1	1.0	1.0	1.0	0.8	0.8	1.1	1.2	1.1		
			4.8	4.8	4.9	4.8	4.3	4.8	4.3	3.9	4.0	4.7	4.9	4.6	4.4	4.6	4.9		
			0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.4	0.7	0.6	0.6	0.5	0.4	0.5	0.7	0.6	0.4		
			4.8	4.8	4.8	4.9	4.2	4.6	4.6	4.7	4.0	4.8	4.8	4.7	4.5	4.7	4.7	1.8	2.2
			0.5	0.5	0.4	0.4	0.9	0.8	0.7	0.6	1.0	0.5	0.5	0.8	0.7	0.8	0.7	0.6	0.7
			4.7	4.8	5.0	4.8	4.3	4.7	4.5	4.3	4.0	4.7	4.8	4.3	4.0	4.5	4.5		
			0.5	0.4	0.0	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	1.4	0.5	0.4	0.5	0.6	0.5	0.5		

本アンケートでは、上記質問項目以外（授業全般、履修手続き、その他）について、自由記述による回答を求めた。そこから得られた主な意見を内容別に以下にまとめた。

各種目別においてそれぞれ多様な意見が聞かれたが、ここでは、全般に共通し、複数みられた意見をまとめて記述する。

授業全般

楽しかった。授業内容が良かった。満足。知識が増えた。運動になった。コミュニケーションがとれた。教員（教員の指導）が良かった。また履修したい。運動量が少ない。技術レベルが合わなかった。雨天時の対応がわかりにくい。

施設

グラウンドの整備を望む（陸上競技場、下田サッカー場）。更衣室の充実を望む、ロッカーが欲しい。施設が遠い（下田地区、蝮谷）床が滑る（記念館）。エアコン、換気設備が欲しい（卓球場、エクササイズスタジオ、記念館）。狭い、人数が多すぎる（エクササイズスタジオ、蝮谷テニスコート）。施設を授業以外にも開放してほしい（プール、トレーニングルームなど）。

用具

ラケットが古い、壊れている、足りない（卓球、バドミントン、ソフトボール）。空気入れがほしい。

カリキュラム・履修関係

春・秋学期別々に登録したい。卒業認定単位数を増やしてほしい。認定単位を統一して。2単位にして欲しい。手続きがわかりにくい。事前の情報が不足（合宿種目）、日吉以外の地区への情報が不足。授業数を増やしてほしい。（全般、フットサル、テニス、サッカー）三田での種目を増やしてほしい。大学院生への情報がほしい（履修案内の配布など）

その他

費用の内訳を知りたい。現地集合はたいへん。暑さが運動に不適切（シーズンスポーツ種目）。

授業そのものにはほとんどの履修者が満足しているようである。但し、シーズンスポーツの中には、指導体制に若干不満ありとの意見もあった。

学生の不満、あるいは要望の中では、施設面に関することが多く、続いて、カリキュラム関係（授業数の増設など）のものが挙げられていた。

第3部 スポーツ振興分野

概 要

体育研究所ではスポーツ振興委員会を中心に様々な形のスポーツ振興活動を行ってきた。

その中で今年度は特記すべき事柄が二点みられる。一つは平成6年度から開催している体育研究所主催のスポーツ大会が、「塾長杯」を争奪する大会として塾生にアナウンスされたことである。このことは塾長をはじめとした塾全体のスポーツ奨励の考え方と我々の活動との一致である。もう一点は、体育研究所としては初めて塾外にむけた公開講座を開催したことである。このことは大学の開放が期待される今日において、その一端を担ったと言えるであろう。

上記他、教職員対象のフィットネスプログラム（エアロビクス教室、トレーニング教室）、塾生対象の所内スポーツ施設（トレーニングルーム、エクササイズスタジオ）の開放等もその規模を拡大して実施された。

そして昨年度に引きつづき「21世紀の大学スポーツを考える」という大テーマのもとに「キャンパスライフとスポーツⅡ」と題してシンポジウムをも開催した。

この章でこれらの詳細を紹介する。

1. スポーツ大会

1) 塾長杯フットサル大会

日 時：予選：平成11年5月27日（木）～6月29日（火） 12：00～13：00 毎週火・水・木曜日

決勝：平成11年10月23日（土） 9：00～17：00

場 所：予選：日吉陸上競技場、決勝：日吉記念館

参加者数：31チーム、350名

参加チームは年々増加し、31チームによる予選リーグ戦を1ヶ月間行った。決勝大会は鳥居塾長のご来場を仰ぎ予選上位16チームを4リーグに分けリーグ戦を行い、各リーグ上位2チームの合計8チームによるトーナメント方式とした。特に決勝大会は白熱した好試合が多数あり、レベルの高さが印象的であった。

11年 塾長杯フットサル大会

体育研究所がお贈りしてきた春の風物特が装いも新たに登場！今年から半年がかりのリーグ戦を勝ち抜けたチームが記念館での決勝大会に臨みます。栄えある塾長杯を手にするのはどのチームか！

主催：体育研究所
協力：体育会
日程：予選リーグ 5月18日（水）以降毎週火・水・木曜日
夏休み 日吉陸上競技場
決勝リーグ 10月23日（土） 9:00～
日吉記念館
試合形式：5人制フットサル男子チームによるリーグ戦の末、各リーグの上位16チームで決勝リーグを行う。
参加チーム：02チーム～49チーム（予選のみ完全登録制）
申込手続：体育研究所にて申込用紙を配布し、用紙に必要事項を記入の上、参加費2100円を体育研究所へ。
参加費：1チーム500円。
5月17日（日）までに、体育研究所へ11年大会参加費を納入してください。

問い合わせは体育研究所 福田 野口 須田まで



2) 塾長杯バレーボール大会

日 時：予選：平成11年6月1日（火）～7月6日（火） 12：15～13：00 毎週月・火曜日

決勝：平成11年10月9日（土） 9：00～17：00

場 所：日吉記念館

参加者数：28チーム、230名

白熱した予選リーグの末、最強グループ11チーム、普通グループ11チームに分けられた。決勝大会当日は、鳥居塾長、湯川常任理事のご出席を戴き大いに盛り上がった大会となった。最強グループにおいては、体育会顔負けのレベルの高いゲームが展開され、鳥居塾長、湯川常任理事を大いに唸らせる大会となった。決勝戦はシーソーゲームの手に汗を握る熱

戦のうちに幕を閉じた。普通グループにおいては、体育研究所チームの参加もあり、男女混合チームもあり、和気藹々とした雰囲気の中で行われた。表彰式では、塾長により塾長杯、賞品を戴き、それぞれの選手は感激していた。また、スポーツを愛好するようにとお言葉を戴いた。懇親会では、塾長はじめ常任理事、体育研究所教員と懇談をし、記念撮影などで盛会裡のうちに終了した。

3) Collegiate Ball-Games Festa 99

日 時：平成11年4月17日(土) 9:00～15:00

場 所：日吉陸上競技場

主 催：Collegiate Ball-Games Festa 99 実行委員会（日本ラクロス協会他）

協 力：体育研究所

対 象：塾内外新生及び近隣住民など

趣 旨：ボールゲームの楽しさの普及とスポーツ人口の拡大

内 容：・ホッケー、ラクロスの男女塾内チーム対塾外チームによる模擬ゲーム

・スポーツ体験コース

（種目：ホッケー、ラクロス、バレーボール、サッカー、タッチフットボール）

・チアリーディング同好会と慶応義塾体育会器械体操部トランポリン部門による演技披露

Collegiate Ball-Games Festa を本年は慶応義塾大学で開催した。横浜市、神奈川新聞などの協力を得て、約250名の参加者があった。午前中に各種目を希望者が体験し楽しい雰囲気で盛り上がった。体験コース終了後、学習院大学チアリーディング部と慶応義塾大学ソングリーディング同好会の華やかな演技と慶応義塾体育会器械体操部におけるトランポリンの華麗な演技披露が行われた。午後からは、ホッケー（女子：フェリス女学院大学 VS 慶応義塾大学）、ラクロス（男子：U19 日本代表 VS 慶応義塾大学、女子：フェリス女学院大学 VS 慶応義塾大学）の試合を観戦し、盛会裡のうちに終了した。



4) 第28回塾長杯・体育会理事杯争奪嬭谷クロスカントリー大会

主催：慶應義塾体育会

協力：体育研究所

日時：平成11年12月4日(土) 14:00 スタート

場所：日吉陸上競技場及びその周辺

参加者数：約 350 名

今年は、去年の雨天開催とは打って変わって快晴で迎えることができた。体育研究所では体育会主催の本大会を事前の広報活動(スポーツクラス等において)、日吉でのエントリー受付、当日の給水所の設置などで協力した。

2. 公開講座

公開講座開設にあたって

21世紀に向けて、新たな大学の姿としてかねてより懸案事項であった公開講座を本年度より開講した。

これからの大学に求められる姿はどのようなものか、またどうあるべきかを検討した結果、その一つとして公開講座を開講するという結論を得た。このことは地域住民へのサービス、健康管理へのアドバイス、施設開放はもちろんのこと市民に大学というところをもっと知って欲しいという意図が含まれている。

また高齢化社会に向かって、求められる生涯体育のあり方における一つの手助けになり、地域発展に少しでも貢献する使命が、我々にはあると思われた。このようなことを踏まえて、4月から開講に向けての準備を始めた。

まず、塾当局へ開講するにあたっての主旨、概要の説明にあたり、湯川常任理事より快諾を得、また非常に期待もされた。その後、期日の設定、ポスターの作成、広報、申し込み方法等の作業に入り、総務課の協力を得て、開講の運びとなった。

総務課の多大な尽力には大変感謝している次第である。

今年度はスタートの年度であり、諸々において問題点が生じたことは今後の課題として、まずは、体育研究所所員が一丸となって開講できたということは、これからの研究所の新たな一歩の踏み出しに違いないと思っている。

今後も、範囲を広げて、より良いキャンパスづくりを目指し、また、住みやすい社会づくりへの貢献に関与していきたいと、所員一同なお一層の研究、教育に励む所存である。(綿田)

慶應義塾大学公開講座

「スポーツ」

タイトル	日付	開講時間	講義人数	受講料	申込締切日	講師
新卒者のための卒業論文	平成11年7月17日 (日) 14:00～19:00 全6回	14:00～19:00	30名	4,000円	7月9日 (土) 必着	高橋 隆一 (慶應義塾大学 経済学専攻)
ニギエの健康アップのための のびのびエクササイズ	平成11年8月25日 (土) 18:00～19:00 全6回	18:00～19:00	25名	4,000円	8月15日 (金) 必着	高橋 隆一 (慶應義塾大学 経済学専攻)
やさしいマラソントレーニング	平成11年10月4日(土)より 毎週月・木曜日(50分)全6回	18:00～19:30	30名	4,000円	9月25日 (月) 必着	湯川 武吉 (慶應義塾大学 経済学専攻)
社交ダンス入門	平成11年10月16日 (土) 18:00～19:30 全6回	18:00～19:30	20名	4,000円	10月2日 (木) 必着	湯川 万子 (慶應義塾大学 経済学専攻)

【場所】慶應義塾大学 日吉キャンパス

【対象】健康・スポーツに関心のある方

【人数】上回参加。応募者多数の際は抽選させていただきます。

【申込方法】住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、はがきもしくはFAXでお知らせ下さい。

【申込】お問い合わせ先
慶應義塾大学総務課
〒223-8521
神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1
Tel. 045-653-1111 内線2000
Fax. 045-653-8704

1) 中高年のための水泳教室

担当者：○高嶺隆二・小森康加（体育研究所）、ドートレー・昌子（塾員）

日 程：平成11年7月17日～8月8日 12:00～13:30 毎週土・日曜日 全8回

場 所：日吉プール

参加者数：20名

受講料：7,000円

担当者から一言：

年齢が37歳から68歳と幅広く、技術的には初めて水泳を習う人からスイミングスクールのインストラクター、または、いろいろな水泳教室に参加している人まで多彩なレベルの参加者が集まり、和気あいあいとした楽しい雰囲気を進めることができた。最終日には、全員の進歩がみとめられ、「次の講座はいつですか？」といった質問が出るなど、この種の講座は地域住民に限らず、多くの社会人に興味と期待をもって受け入れられる企画であることを痛感した。（高嶺）



2) 社交ダンス（入門）

担当者：○篠原しげ子（体育研究所）、竹内正男（星薬科大学）

日 程：平成11年10月16日～12月4日 13:30～15:30 毎週土曜日 全8回

場 所：体育研究所（3F）エクササイズスタジオ

参加者数：20名

受講料：7,000円

担当者から一言：

入門コースということで、ジルバ、ブルース、マンボ、ルンバ、ワルツと様々なリズムに挑戦してもらいました。23歳から68歳までと年齢の幅が大きく、不安な点もありましたが、受講生の方々はそれぞれ自分なりに頑張り、そして楽しみながら、終始なごやかなムードでこの講座を終えることができました。（篠原）

3) シニア・エイジの健康アップのためのデイリー・エクササイズ

担当者：○近藤明彦・松田雅之・山内 賢（体育研究所）、荒木達夫（日本体育大学）

日 程：平成11年9月25日～11月13日 13：00～15：00 毎週土曜日 全8回

場 所：日吉陸上競技場及び体育研究所（1F） トレーニングルーム他

参加者数：10名

受講料：7,000 円

担当者から一言：

参加者の年齢が40歳台から70歳台までと幅広かったため、講習の前半は、運動の強度・量とも低めに設定した。その後受講生の体力レベルをみながら徐々に運動強度・量ともに上げていき、怪我等の問題もなく、無事終了することが出来た。受講生の方々の感想をみると、この講座での経験をふまえ、日常生活のなかでも、各自で課題をもって健康アップに役立つ各種エクササイズを実行してくれているようである。（近藤）

4) やさしいマシントレーニング

担当者：○今栄貞吉・野口和行・村松憲・須田芳正・望月康司（体育研究所）

日 程：平成11年4日～11月29日 18：00～20：00 毎週月・木曜日 全15回

場 所：体育研究所（1F） トレーニングルーム

参加者：8名（月曜日のみ1名、両日7名）

受講料：6,000 円（単日）、12,000 円（両日）

担当者から一言：

週2回というスケジュールながら、毎回ほとんど欠席者がなく、このような受講生の意欲的な参加は、うれしい限りです。この講座で、受講生達は、ストレッチ、体操、筋力トレーニング、有酸素運動などの重要性、日常生活の中でのエクササイズを実行するうえでの方法、または健康に対する意識などを理解してもらえたように思う。後日、親子で参加していたある受講生から手紙をいただきました。この講座を通して、自分達の体力不足を痛感するとともに健康に対する意識が芽生え、家庭内でのエクササイズの他に、近所のフィットネスクラブにも通い出したそうです。本講座がきっかけとなり、日常の中で健康増進の意識を持ってもらえたことは、まさしくこの講座一番のねらいであり、講座担当者として何よりうれしく思います。（今栄）

3. 教職員対象フィットネスプログラム

1) エアロビクス教室

担当者：鈴木智子（体育研究所非常勤講師）

日 程：春：平成11年5月14日～7月9日／秋：平成11年10月15日～12月10日

毎週金曜日 17：00～18：00 春秋各8回

場 所：体育研究所（3F） エクササイズスタジオ

参加者数：春21名、秋学期13名

**1999 教職員対象
エアロビクス教室**

期間：10月15日～12月10日
毎週金曜日 午後5時～6時
場所：体育研究所3F
エクササイズスタジオ

インストラクター
鈴木智子先生



初心者、中高年の方々大歓迎

2) トレーニング教室

担当者：石手靖（春秋・月）・野口和行（春・木）・村松憲（秋・木）（体育研究所）

日程：春：平成11年5月10日～7月8日／秋：平成11年10月22日～12月20日

毎週月・木曜日 16：30～18：00

場所：体育研究所（1F）トレーニングルーム

参加者数：春延べ20名、秋延べ51名

エアロビクス教室（金曜）、トレーニング教室（月・木曜）共に日吉キャンパスの夕刻開催であるため、塾教職員対象とは言うものの時間的・場所的に限られた方々の参加となっている。しかしながら5年目を迎える本プログラムには、大学日吉キャンパスの教職員だけではなく、慶應義塾高等学校の教職員、大学矢上キャンパスの教職員の参加も目立ちはじめた。一日の勤務を終えた後に仲間と一緒にひと汗流すことは、心身の健康のために有効であると同時にコミュニケーションの場として楽しいものであると考える。

4. シンポジウム

今回は前回に引き続き「21世紀の大学スポーツを考える」という大テーマのもとに、テーマ「キャンパスライフとスポーツII」と題して、4人のシンポジストの方々より、大学スポーツについて、大学の外側から見た立場のご意見を頂き、そのあり方を検討した。昨年の「キャンパスライフとスポーツ」では大学スポーツの関係の方々より、さまざまな角度からご意見を頂き討論を加えた。今回はより広い視野にたって新たなスポーツ文化の模索を試みた。



中西 正和
慶應義塾大学
理工学部

魅力あるキャンパスとは？
大学スポーツの原点とは？
キャンパスに何を期待する



西田 善夫
NEK解説委員
横浜国際競艇技場長

体育研究所シンポジウム
キャンパスライフとスポーツ

新たなスポーツ文化を目指して



孝 信二
(株) ティップネス

平成11年12月11日(土)
PM 13：00～15：00
日吉キャンパス J-14講教室
聴講無料



司会：石手 靖
慶應義塾大学体育研究所



鈴木 康正
慶應義塾高等学校

慶應義塾大学体育研究所
C40-503-1111(内線2750)

大テーマ：「21世紀の大学スポーツを考える」

テーマ：「キャンパスライフとスポーツⅡ」

サブテーマ：「新たなスポーツ文化を目指して」

日 程：平成11年12月11日（土） 13：00～15：00

場 所：慶應義塾大学日吉キャンパス14番教室

参加者数：40名

挨 拶：高嶺隆二（体育研究所所長）

シンポジスト：

1. 中西正和（慶應義塾大学理工学部教授・慶應義塾大学学生総合センター元副部長）
『キャンパスライフでのスポーツの効用』
2. 峯信二（㈱ティップネス商品企画グループチーフマネジャー）
『大学に期待すること』
3. 鈴木康正（慶應義塾高等学校教諭・慶應義塾高等学校クラブ・生徒会担当主事）
『学生スポーツの意義』
4. 西田善夫（NHK 解説委員・横浜国際総合競技場長）
『大学スポーツの原点』

司 会：石手靖（体育研究所）

内容・感想：

大学スポーツの歴史・現状を幾つかの角度から討論した前回の内容を受け、今回はその発展に期待感を持っているさまざまな立場の方々をシンポジストとしてお招きしご意見をお聞きした。

中西氏は「学生生活実態調査」に携わっていた立場より、学生のキャンパスに滞在する時間が増えているにもかかわらず、その反面スポーツをしない学生が増えていると述べた。健康的なキャンパスライフというイメージは現状にはない。しかし、その環境を整えるには大学におけるスポーツの効用を、我が大学が率先して示し実証していくことが肝要であると提唱した。峯氏は民間フィットネスクラブの経営に携わっている立場より、大学が新たなスポーツ文化の拠点となる必要性和可能性について期待感を込めて語った。鈴木氏は高等学校教諭として、魅力のある大学、魅力のあるキャンパスがスポーツマンシップを持った学生を育成し、人格形成に役立つのであると力説した。

そして最後に元 NHK アナウンサーで野球やオリンピックの実況他、スポーツ全般に詳しい西田氏より大学スポーツの評価は体力や技による戦績ではなく、スポーツと学生の関わり方にあるという提言がなされた。

シンポジストの発表後、約30分間、会場の聴衆者をまじえて質疑応答がなされた。その人数には企画側としては期待通りとは言にくいものであったが、スポーツや大学生生活に興味を持つ熱心な方々が塾内外より参加したことで意味のある質疑であった。

5. 学生総合センターとの協力

1) 第14回「スキーの集い」へ講師派遣

主 催：慶應義塾大学学生総合センター「大学生生活懇談会」

期 間：平成12年2月7日（月）～10日（木）

場 所：新潟県六日町 ミナミスキー場、上越国際スキー場

宿 泊：いろいろ庵

引率教職員：今栄貞吉、植田史生、石手靖（体育研究所）、磯貝友子（商学部）、常盤晃（三田学生総合センター）、山崎由加里（矢上学生総合センター）

参加者数：38名

天 候：晴（2/7）、雪（2/8）、雪（2/9）、雪（2/10）

体育研究所からは、今栄（上級）、植田（初級）、石手（中級）の3名がスキー講習の指導に当たるため参加した。今年は過去の参加者の声を反映して一日だけバラエティーに富んだゲレンデを求め、上越国際スキー場へバス（貸切）で移動した。天候がいまひとつでビックゲレンデを快滑走とはいかなかったものの、キャンパスを越えた一年生から大学院生まで明るく積極的な塾生が今回も集い、スキーを通して思い出に残る合宿生活を満喫したと言えよう。

6. 所内施設の開放

1) トレーニングルーム（1F）の開放

塾生の健康の増進と体力の向上を目的として、トレーニングルームの授業使用時間以外を塾生に開放した。そこには常時所員がスタッフとして在室し、初心者に対するトレーニング指導をはじめ、各器具の使用方法的説明、健康体力テストの実施、トレーニングプログラムの作成、また塾生（利用者）のさまざまな質問に対し幅広い視野に立った応答をした。トレーニングルームが塾生間及び教員と塾生とのコミュニケーションの場としても一役買っていることは確かである。

表1 トレーニングルーム利用者数

	学 生	教 職 員	合 計
春 学 期	104	20	124
秋 学 期	251	51	302
年 間	355	71	426

表2 平成12年度春学期
トレーニングルームアドバイザー

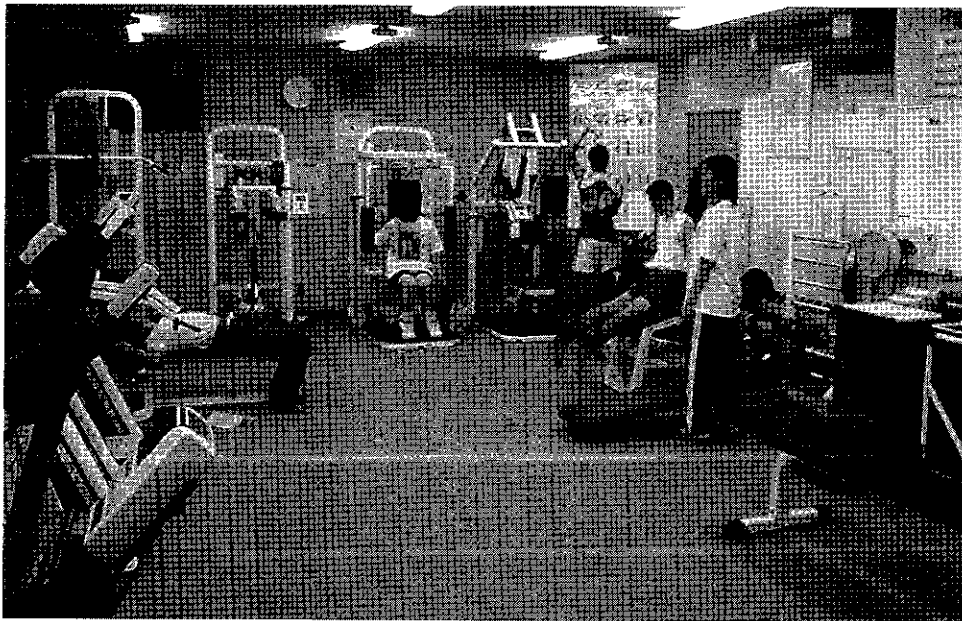
	月	火	水	木	金
15:00		なし			
	小森		望月	須田	野口
16:30		なし			
	石手		村松	野口	村山
18:00					

月・木の16:30-18:00は教職員トレーニング教室

表3 平成12年度秋学期
トレーニングルームアドバイザー

	月	火	水	木	金
15:00		なし			
	小森		望月	須田	野口
16:30		なし			
	石手		野口	村松	村山
18:00					

月・木の16:30-18:00は教職員トレーニング教室



2) エクササイズスタジオ（3F）の開放

塾生の多種多様な活動への支援活動として、エクササイズスタジオの授業使用時間以外を塾生サークル等に開放した。陸上競技場に面したエクササイズスタジオは他2面が鏡張りになっており、板張りの床とあわせてダンス系の運動には最適に思われる。

表4 エクササイズスタジオ使用団体

団体名	春学期使用回数	秋学期使用回数	合計
ボクシング愛好会	18	16	34
Avante! CAPOERA KEIO	15	4	19
応援指導部チアリーディング	1	0	1

3) SPORTS PHOTO GALLERY（スポーツフォトギャラリー）の開設

体育研究所正面入口のロビー壁面を利用して、キャンパス周辺のスポーツ関連写真を展示した。写真の提供等、慶應義塾大学卒業アルバム委員会の協力を得た。

7. スポーツ振興活動の今後

社会が急速に変化している。大学を取り巻く環境も例外ではない。キャンパスのスポーツはどうか。若者の気質も変化し大学生の気質も変化している。スポーツも多様化しその楽しみ方もさまざまになった。

大学生が過ごすキャンパスとはいかなるものであるのかを考える時、彼らのスポーツ活動を切り離して考えることは充分とは言えない。何故ならばスポーツは様々な人々の生活や人生を心身共に豊かにしているひとつの文化である。

我々の大きなターゲットである塾生に対するスポーツの実践指導は、従来のような体育の授業だけではその目的を果たせない。多様化したがゆえその目的を再確認することが求められる。新しい発想がこれからは威力を発揮するであろう。

スポーツを振興させるには、気軽に気楽にできること、そしてなにより楽しいことである。塾風を支えるためにも、塾生の中にスポーツを振興させることをめざす。 (石手)

編集後記

体育研究所活動報告書も今年で5冊目を数えることになりました。慶應義塾における健康・スポーツに関するさまざまな情報の発信源として所員一同さらに力を尽くしてまいります。

体育研究所の活動をご理解いただき、さらにご指導いただければ幸いです。

活動報告書編集委員会

平成11年度活動報告書

平成12年7月1日発行

[非売品]

編集：活動報告書編集委員会

高嶺 隆二 安藤 勝英 佐々木玲子
吉田 泰将 石手 靖 村山 光義
野口 和行

発行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

制作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

